

十日町市博物館研究紀要

BUULETIN OF THE TOKAMACHI CITY MUSEUM

No. 4

April 2025

十日町市博物館研究紀要第 4 号

目次

論文等

十日町市下原田 A 遺跡発見の陥し穴跡	阿部 敬	1
地域博物館を考える (2) - 調査研究と普及啓発活動 -	石原 正敏	6
越後妻有地域における仏像調査報告 - 天福山真浄院 -	福島 治樹	21
十日町市野首遺跡における縄文時代中・後期の黒曜石利用	菅沼 亘	39

十日町市下原田 A 遺跡発見の陥し穴跡

Trap-pit from Shimoharada A site in Tokamachi City

阿部 敬¹

ABE Satoshi

(2025年3月7日受付; 2025年3月10日受理)

陥し穴跡は縄文時代の狩猟行動について具体的に知ることができる重要な資料である。日本全国に見られ、特に東日本においてはおびただしい数が発見されている。本稿では令和5年度に発掘調査された十日町市下原田 A 遺跡で発見された溝型の陥し穴跡について報告するとともに、これまで発見された市内の陥し穴跡を集成して検討した。その結果、十日町市内では8遺跡で縄文時代と推測される陥し穴跡が発見されており、うち6遺跡で溝型が検出されていることがわかった。一部には列配置や組配置が認められる。また帰属時期の推定できる陥し穴跡は溝型で、縄文時代中期以降に帰属するものであることを確認した。

はじめに

縄文時代の陥し穴跡は全国的に存在し、特に北海道や東北地方北部に多いことが知られている。関東地方で総合的な研究の深化が図られ(今村 1976・1983 ほか、宮沢・今井 1976、中村 1998、佐藤 1989・1998、金持 2012 等)、北海道(藤原 2013・2018 ほか)、東北地方北部(田村 1987、坂本・杉野森 1997 等)、九州(富永 1989、高橋 1994 等)、中国地方および石川・富山県(稲田 1993、足立 2016)については悉皆的な集成に基づく検討が行われてきた。新潟県においても地域的な検討が認められる(山崎 2000、小池 2002)。十日町市においては本報告された事例が1件のほかに市史の記述があるものの、集成や具体的な検討は行われてなく、現状では個別の詳細な報告の蓄積が将来の研究にとって意義をもつと考えられる。本稿では新潟県十日町市の信濃川右岸段丘上で令和5年度に発掘調査された下原田 A 遺跡出土の縄文時代の陥し穴跡について報告し、今後期待される諸研究の一助としたい。

1 下原田 A 遺跡

(1) 調査概要

下原田 A (しもはらだえー) 遺跡は新潟県十日町市川

治 4562 番ほかに所在し(図 1)、信濃川中流域右岸の十日町面と古期段丘に挟まれた扇状地・崖錐堆積物上(信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ 2003)に立地する(図 5)。標高は約 165m である。十日町盆地の中央を北流する信濃川の支流、川治川(かわじがわ)と南の羽根川(はねがわ)に挟まれている。十日町面の離水年代は縄文時代早期後半から前期頃とみられることが



図 1 下原田 A 遺跡(令和5年度調査区)の位置

1 十日町市博物館 〒948-0072 新潟県十日町市西本町一丁目 448 番地 9

ら、本遺跡についても早期前半には遡らない可能性が高い。

本遺跡は土地改良事業に伴う試掘調査により平成22年度に発見され（十日町市教育委員会編2011）、平成23年度に本調査が行われた（十日町市教育委員会編2012）。調査の結果、土坑5基と縄文時代中期の土器片および打製石斧などが発見されたが、報告書が刊行されてなく調査範囲をはじめ土坑の性格なども明らかではない。

令和5年度に集合住宅建設に伴う確認調査により平成23年度調査区の南に隣接する範囲で発掘調査が行われた（図1・2）。東西に伸びる5つのトレンチ（T1～4。トレンチ4は東西に分割。）を重機掘削し、人力で壁面および床面の精査を行い、結果として陥し穴跡3基（001～003SK）発見された。遺物は縄文のものと推測される土器、石器（いずれも細片）と、時期不明の陶器が数点出土した。

本遺跡の基本土層は1層：表土（耕作土）、2層：黒褐色極細粒砂、3層：褐色極細粒砂、4層暗褐色極細粒砂、6層：暗褐色細粒砂、7層：にぶい案黄褐色極細粒砂、8層：黄褐色細粒砂、9層：にぶい案黄褐色細粒砂である。土器と石器は2層から出土し、僅少なながらこの層が包含層と見られる。

陥し穴は3層上面を検出面として3基発見された。平成23年度調査の成果からみて縄文時代に帰属する可能性があるが、数の少なさも手伝ってその配列に規則性を見出せないことや遺物も極めて少ないことから本調査には至らなかった。確認調査報告書（十日町市教育委員会編2023）では紙数の関係から遺構配置と写真の掲載にとどまっていた。

（2）陥し穴跡（図3・4）

ア）001SK

調査区南半のT4西端で壁面の精査中に発見された。掘り込み面は包含層中とみられ、深さは当時に近い状態を復元していると推測される。長軸3.62m、最大幅0.35m、深さ1.02mで溝型を呈する。底面両端が開口部よりも奥へ入り込む形状である。底部に小土坑は認められなかつ

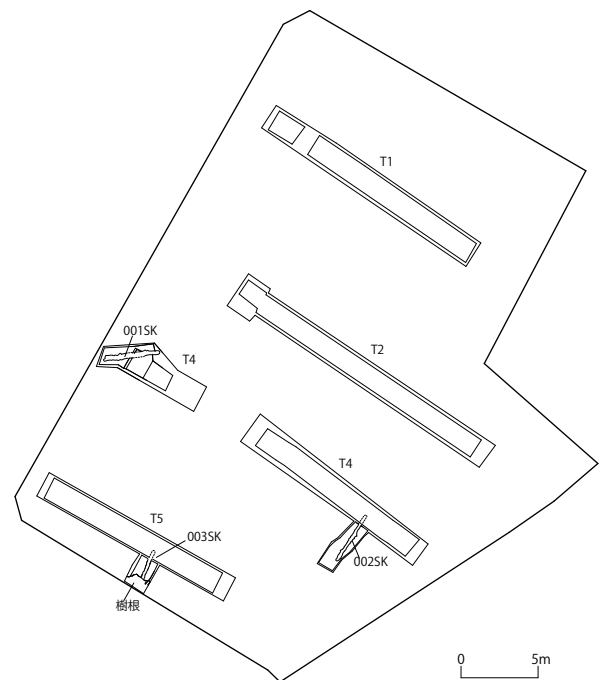


図2 下原田A遺跡（平成23年度）の遺構配置

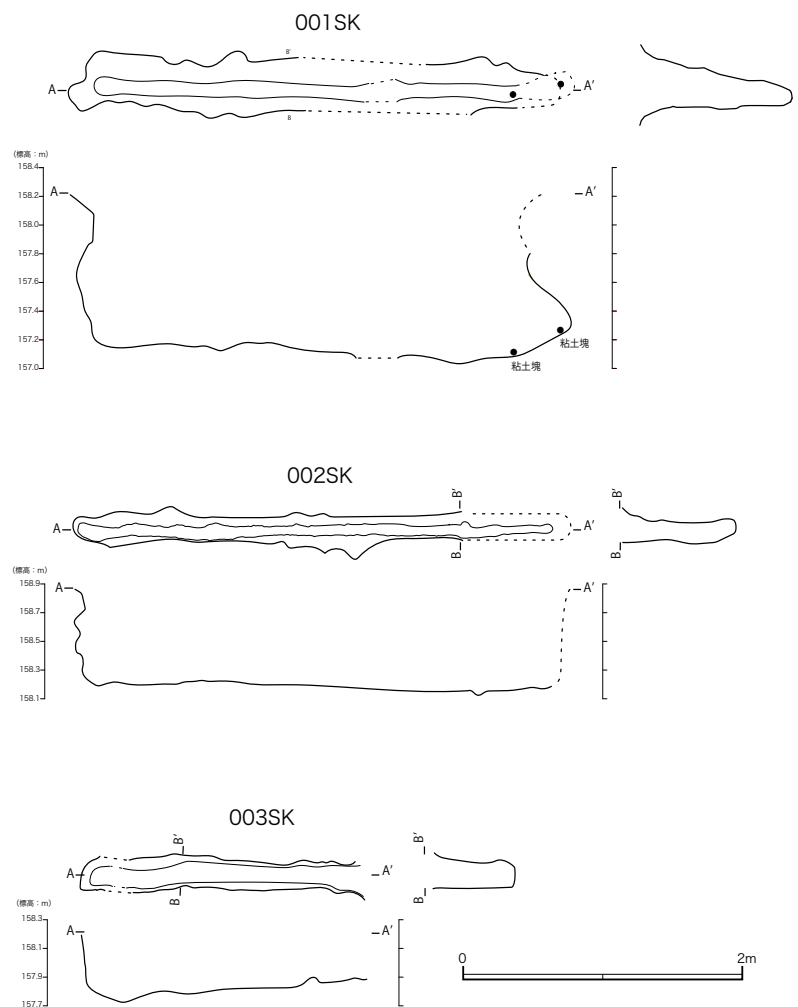


図3 下原田A遺跡（平成23年度）の陥し穴跡



001SK



002SK



003SK

図4 下原田A遺跡の陥し穴跡

た。

中央付近を重機のトレンチ掘削によって切り取られたため一部が不明だが、底部を含む下部3分の1程度が残されたため、1基の遺構として捉えられる。東側は側面が内湾しており、測量前に崩落したため、図は写真から復元したものである。なお底部ないしこの直上から粘土塊が2点出土した。本遺跡では異質な存在であり注意深く取り上げたが、分析等は行っていない。

イ) 002SK

T4の東側で壁面の精査中に発見された。長さ3.63m、最大幅0.31m、深さ77mで溝型を呈する。底部に小土坑は認められなかった。重機掘削のトレンチに3分の1ほどを切り取られた状態で発見されたが、遺構底面がトレンチ底面に残っていたこととおおよその全長を捉えることができた。ただし上端は耕作により削平されており、掘り込み面は失われていると考えられる。残された南端の壁面はなだらかではなく、ボコボコしており、当時の掘削痕跡と思われた。遺物は出土しなかった。

ウ) 003SK

T5の中央付近で壁面の精査中に発見された。長さ2.06m、最大幅0.26m、深さ0.45mで溝型を呈する。底部に小土坑は認められなかった。南北に伸びるうちの南端部は樹根によると思われる攪乱を受けており全長は不明である。また、耕作により上部を大きく削平されているため、深さについても復元していないと推測される。遺物は出土しなかった。

2 十日町市内の陥し穴跡

十日町市内の類例について、既存の発掘調査報告書(十日町市教育委員会編2020)、『十日町市史 資料編 考古2』(十日町市史編さん委員会編1996)、十日町市博物館リーフレット(十日町市博物館編2014)をもとに集成した(表1)。この結果、大井久保遺跡で円形1基(同編1996)、赤羽根遺跡(同編1996、十日町市博物館編2014)で円形または楕円形5基、椿池遺跡で楕円形14基と溝型2基(同編1996)、苧島小原遺跡で溝型1基(十日町市教育委員会編2020)、つつじ原B遺跡で溝型2基(同編1979、十日町市史編さん委員会編1996)、大清水遺跡で溝型4基(同編1996)の報告ないし記述があることがわかった。合計33基である。これらのほかに天池B遺跡でも溝型が発見されたとの記述があるが、形状や数量は不明だった(同編1996:p.621)。全体として溝型は13基、比率では4割程度であるが、溝型が検出される遺跡の比率は8遺跡中6遺跡であり7割以上である。

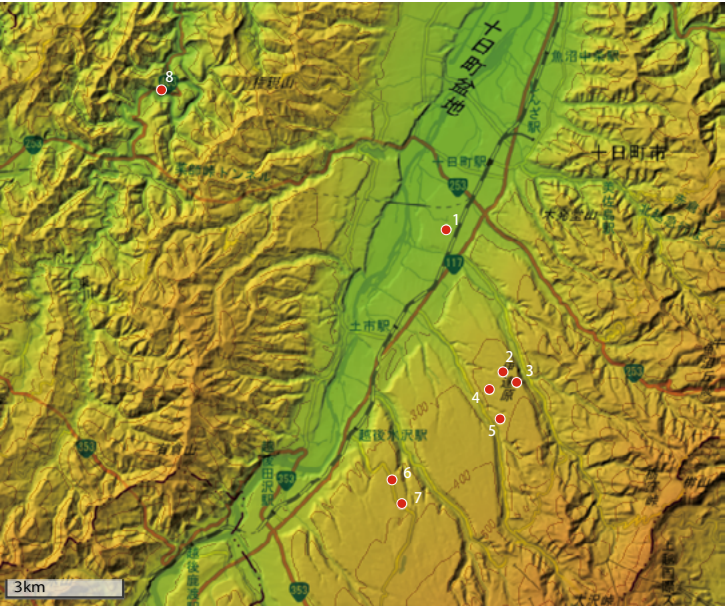
遺跡の分布(図3)をみると、多くは高位段丘に位置しており、現状では下原田A遺跡のような低位の立地は珍しいようである。

陥し穴跡は通常、遺物を伴うことは稀であり、上記の

遺跡でも同様の傾向が認められるが、時期のわかる遺構との切り合い関係（重複の順序）により帰属時期を推定できることがある。上記遺跡においては、つつじ原B遺跡の陥し穴が中期末葉の沖ノ原式土器期の第5号竪

表1 十日町市内の陥し穴跡

遺跡	所在地	調査年	報告上の名称	形態	底部小土坑数
下原田A	谷地丑	2023	001SK	溝型	-
下原田A	谷地丑	2023	002SK	溝型	-
下原田A	谷地丑	2023	003SK	溝型	-
赤羽根	伊達	1983・1984	第1号陥し穴	円形	1
赤羽根	伊達	1983・1984	第2号陥し穴	円形ないし楕円形	1
赤羽根	伊達	1983・1984	第3号陥し穴	円形ないし楕円形	1
赤羽根	伊達	1983・1984	第4号陥し穴	円形ないし楕円形	1
赤羽根	伊達	1983・1984	第5号陥し穴	円形	1
つつじ原B	伊達	1976	陥し穴	溝型	-
つつじ原B	伊達	1976	攪乱	溝型	-
大清水	伊達	1989	第1号陥し穴	溝型	-
大清水	伊達	1989	第2号陥し穴	溝型	-
大清水	伊達	1989	第3号陥し穴	溝型	-
大清水	伊達	1989	第4号陥し穴	溝型	-
椿池	馬場	1991	第1号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第2号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第3号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第4号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第5号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第6号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第7号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第8号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第9号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第10号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第11号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第12号陥し穴	長方形	1
椿池	馬場	1991	第13号陥し穴	溝型	-
椿池	馬場	1991	第14号陥し穴	楕円形	-
椿池	馬場	1991	第15号陥し穴	溝型	-
椿池	馬場	1991	第16号陥し穴	長方形	1
大井久保	馬場	1992	陥し穴	長方形ないし楕円形	1
芋島小原	芋島	2020	3号土坑	溝型	-
天池B	伊達	1975・1989	土坑（陥し穴）	溝型	-



1: 下原田A、2: つつじ原B、3: 赤羽根、4: 天池B、5: 大清水、6: 椿池、7: 大井久保、8: 芋島小原

図4 十日町市内の陥し穴跡出土遺跡の分布

穴住居跡を切っている例と、中期前葉の土器が出土した第4号竪穴住居跡を切っている例が認められた。それぞれ切られた住居跡の時期よりものちの時期に帰属する可能性が高い。どちらの陥し穴跡も溝型である。特定の形状が特定の時期にのみ帰属するとは言えないが、参考になるだろう。

配置については、赤羽根遺跡では円形ないし楕円形陥し穴の組配置、椿池遺跡では長方形陥し穴の列配置が2ないし3列認められた。既存研究で確認されている陥し穴跡の形態および配置のバリエーションの範疇にあると考えられる。

おわりに

下原田A遺跡の陥し穴跡を報告し、あわせて十日町市内の陥し穴跡を集成し、検討を行った。一部の陥し穴跡については帰属時期を推定する手がかりがあることもわかった。陥し穴構築には地域生態に応じた生業の内容、空間利用、時間管理など多くの変数に関わると推測されるため、民族誌モデルの参照とより広域の資料収集および対比が必要である。今後の研究に期待したい。

参考文献

足立拓郎 2016「石川県内の縄文時代陥し穴猟-関東地方との比較から-」『北陸史学』65、北陸史学会

藤原秀樹 2013「Tピットについて」『北海道考古学』49、北海道考古学会

藤原秀樹 2018「北海道・北東北の縄文時代前半期の陥し穴」『北海道考古学』54、北海道考古学会

今村啓爾 1976「縄文時代の陥し穴と民族誌上の事例の比較」『物質文化』27、物質文化研究会

今村啓爾 1983「陥穴（おとしあな）」『縄文時代の研究』2、雄山閣

稲田孝司 1993「西日本の縄文時代の落とし穴猟」『論苑考古学』天山舎

金持健司 2012「多摩ニュータウン遺跡群における陥し穴土坑の形態別出現率」『生産の考古学』同成社

小池義人 2002「妙高山麓の陥し穴土坑について」『小重遺跡』新潟県教育委員会

九州縄文研究会・南九州縄文研究会 編 2004『九州における縄文時代のおとし穴状遺構』

信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ 2003「信濃川中流域における第四紀末期の河成段丘面編年」『地球科学』57巻、95-110頁

宮澤寛・今井康博 1976「縄文時代早期後半における土壌をめぐる諸問題」『調査研究収録』31、港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

宮田栄二 2007「九州地方の陥し穴猟」『縄文時代の考古学』5、同成社

中村信博 1998「溝型陥し穴研究所説」『栃木県考古学

会誌』12

坂本真弓・杉野森淳子 1997 「青森近県における陥し穴集成」『研究紀要』2、青森県埋蔵文化財センター

佐藤宏之 1989 「陥し穴土坑と縄文時代の陥し穴猟」『多摩ニュータウン遺跡 - 昭和 62 年度 - 第 5 分冊』東京都埋蔵文化財センター

佐藤宏之 1999 「陥し穴猟の土俗考古学」『縄文式生活構造』同成社

佐藤宏之 2000 『北方狩猟民の民族考古学』北海道出版企画センター

田村壮一 1987 「陥し穴状遺構の形態と時期について」『岩手県埋蔵文化財センター紀要』7

富永直樹 1989 「九州のおとし穴状遺構について」『安武地区遺跡群』2、久留米市教育委員会

十日町市博物館 編 2014 『縄文前期のムラ 赤羽根遺跡』

十日町市教育委員会 編 1979 『つつじ原 B 遺跡』

十日町市教育委員会 編 2011 『平成 22 年度十日町市内遺跡試掘・確認調査報告書』

十日町市教育委員会 編 2012 『平成 23 年度十日町市内遺跡試掘・確認調査報告書』

十日町市教育委員会 編 2020 『林中遺跡発掘調査報告書 林中西遺跡発掘調査報告書 芋島小原遺跡発掘調査報告書 枅形遺跡発掘調査報告書』

十日町市教育委員会 編 2024 『令和 5 年度十日町市内遺跡試掘・確認調査報告書』

十日町市史編さん委員会 編 1996 『十日町市史 資料編 2 考古』十日町市役所

高橋信武 1994 「九州の陥し穴の変遷」『先史学・考古学論究』龍田考古学会

山崎忠良 2000 「奥三面地域の陥し穴状土坑」『本道平遺跡』朝日村

地域博物館を考える（2）—調査研究と普及啓発活動—

Consider of the regional museum 2: Research study and popularization activities

石原 正敏¹

ISHIHARA Masatoshi

(2025年3月7日受付; 2025年3月10日受理)

新しい十日町市博物館（以下、「新博物館」）は、令和2（2020）年6月に開館した。新博物館の基本理念は、「市民・来館者と共に考え、活動し、成長する博物館」である。十日町市の多様で豊かな自然と歴史・文化について、市民・来館者と共に探求し、保全・継承し、その価値を国内外に発信することをビジョンとしている。新博物館は生涯学習の拠点であるとともに、情報発信の拠点という機能を有し、4つの使命を掲げて活動している。

本稿では、資料の収集整理、保管（収蔵）、調査研究、普及啓発という博物館機能の中から、市内の文化財調査、市史編さん事業、歴史文化基本構想策定事業、文化財保存活用地域計画策定事業などの調査研究を取り上げる。また、新博物館開館後の約5年間を振り返るとともに、旧博物館を含めた関係データを再整理し、新博物館の現状と課題について検討することを本稿の目的とする。博物館活動においては「調査研究」、「情報発信と公開」が喫緊の課題であり、文化財の保存と活用においても、多くの課題がある。それらを踏まえ、課題解決に向けた方向性や方法等について考察する。

1. はじめに

十日町市博物館は、昭和54（1979）年の開館以来、「妻有地方の自然と文化」をテーマに、基本理念に掲げた「市民生活に密着した実物教育機関として、いつでも誰でも見たり、調べたりできる、市民のための博物館」を目指して様々な活動を展開してきた（竹内2002ほか）。その中で、重要有形民俗文化財「越後縮の紡織用具及び関連資料」（昭和61年指定）、同「十日町の積雪期用具3,868点」（平成3年指定）、火焰型・王冠型土器群をはじめとする国宝「新潟県笹山遺跡出土深鉢形土器57点（附871点）」（平成11年指定）などが生み出されている。そして、平成26（2014）年から準備を始め、開館41年目となる令和2（2020）年6月に新博物館がオープンした。新博物館の基本理念は、「市民・来館者と共に考え、活動し、成長する博物館」である。十日町市の多様で豊かな自然と歴史・文化について、市民・来館者と共に探求し、保全・継承し、その価値を国内外

に発信することをビジョンとしている。新博物館は生涯学習の拠点であるとともに、情報発信の拠点という機能を有する。

これまで、旧博物館における40年の活動の歩み、耐震改修・展示リニューアルから新博物館の建設への方向転換、新博物館の展示の特徴、開館後およそ1年半の運営にあたって留意したことなどについて紹介した（石原2022）。合わせて、雪文化三館提携や信濃川火焰街道連携協議会など広域連携や地域連携の取り組み、文化資源の魅力増進の取り組みなどについて紹介するとともに、課題と課題解決に向けた取り組み等について考察した。前々稿では、資料の収集・整理・保管、調査・研究活動、実物資料・写真資料など資料の貸出、博物館実習・職場体験、史跡の保存と活用などについて紹介するとともに、現状と課題について考察した（石原2023）。前稿では、調査研究活動における文化財課と博物館の関係性、文化財課の文化財保護と埋蔵文化財の関係性などについて、取り上げた（石原2024）。しかし、市史編さ

1 十日町市博物館 〒948-0072 新潟県十日町市西本町一丁目448番地9

ん事業（昭和60年度～平成8年度）、歴史文化基本構想策定事業（平成27年度～29年度）、文化財保存活用地域計画策定事業（令和4年度～令和6年度）などの成果と地域博物館の関わりについては取り上げることができなかった。文化財の保存と活用、文化財施設の整備と活用、文化財の調査研究と活用という観点から、旧博物館の40年の活動と新博物館開館後のおよそ5年の活動を振り返るとともに、関係データを再整理し、新博物館の現状と課題について検討することを本稿の目的とする。

2. 資料の収集整理と調査研究について

（1）博物館と文化財課の機能

前々稿で紹介したように、博物館には、いわゆる「表の顔と裏の顔」がある。資料の収集整理、保管（収蔵）、調査研究という仕事は裏の顔であり、展示や教育普及などが表の顔である。新博物館においては、文化財課と博物館という2つの組織が、車の両輪のごとく日々の業務に取り組んでおり、調査研究活動の多くを文化財課が担っている（石原2023）。

旧博物館と新博物館の入館者数の比較は、表1のとおりである。また、平成26（2014）年～令和5（2013）年度の収集資料については、表2のとおりである。旧博物館、文化財資料収蔵庫がほぼ満杯の状態であることを考えると、資料の収集整理、保管（収蔵）については見直しの時期にきているといえるだろう。旧博物館の開館が昭和54（1979）年であり、文化財課の誕生が平成2（1990）年であることや文化財課の歩みは、前稿で紹介したとおりである（石原2024）。次に十日町市における文化財の調査、市史編さん事業、「十日町市歴史文化基本構想」と「十日町市文化財保存活用地域計画」について紹介する。

（2）十日町市における文化財の調査

昭和32（1957）年に、新潟県教育委員会による中魚沼郡の総合調査が実施されている（新潟県教育委員会編1958）。歴史、民俗、考古、史跡、植物、地質の各分野にわたる学術調査であった。

その後、神宮寺「本尊・木造十一面千手観音立像」の新潟県文化財指定が契機となり、文化財保護の機運が高まり、昭和47（1972）年4月に旧条例を全文改正して新たな十日町市文化財保護条例が施行されている。昭

和48（1973）年から昭和53（1978）年には、立教大学の学校・社会教育講座学芸員課程の協力を得て、「十日町市における文化財の調査」が行われている。その成果は報告書としてまとめられている（表10）。

『十日町市における文化財の調査Ⅰ』には「琵琶懸城址の実測調査」、「神宮寺の歴史と文化財」、「六箇の歴史と民俗」、『十日町市における文化財の調査Ⅱ』には「魚沼地方の市と縮市」、「原の民俗」、「市教育委員会収集の民俗資料目録」、『十日町市における文化財の調査Ⅲ』には「物産取調書と物産会・博覧会」、「上の山の民俗」、「市教育委員会収集の民俗資料目録」、『十日町市における文化財の調査Ⅳ』には、「上杉氏、堀氏の移封とその検地」、「赤倉神楽」、「赤倉の冬の民俗」、「市教育委員会収集の民俗資料目録」、『十日町市における文化財の調査Ⅴ』には「鉢の石仏」、「石仏地区石造物資料目録」、「鉢の冬の民俗」、「木挽きの仕事と道具」、『十日町市における文化財の調査Ⅵ』には「魚之田川の民俗」、「水沢の水運と陸運」、「十日町の農村歌舞伎舞台ー水沢地区の掛舞台ー」、「水沢の漁撈」、「市教育委員会収集の民俗資料目録」、『十日町市における文化財の調査Ⅶ』には「神宮寺調査の報告」、「十日町組の回米について」が収載されている。これらの報告書に基づいて「神宮寺境内地・山林」や「鉢の石仏」は市の文化財に指定されており、民俗調査成果や収集資料は、旧博物館の資料として有効に活用されている。旧博物館の常設展示解説書の骨格をなしている。

7年にわたり市内各地で行われた調査が、十日町市の文化財保護および文化財行政に果たした役割はきわめて大きい。

（3）十日町市史編さん事業

昭和61（1986）年から平成9（1997）年には、市史編さん事業が行われ、資料編8巻、通史編6巻が刊行されている（表10～表11）。市史編さん室は、旧博物館内に置かれた。「市史編さんの過程で寄贈あるいは寄託を受けた資料、博物館で収集した資料は3万点に達する。このほかに、個人所蔵資料でマイクロフィルムやコピーなどの複製を行ったものがある。これらの資料は、104冊の資料目録にまとめられている」（丸山・佐野1998）。博物館展示では、市史編さんの過程で調査・収集された数多くの資料と史実を広く市民の皆様に公開しようということで企画され、昭和63（1988）年秋に「市史編さん資料展」、平成2（1990）年夏季特別展「市史編さん資料展ー近世妻有俳諧の系譜ー」が開催されて

いる（表3～表4）。また、博物館講座として「十日町を知るⅡ」、「自分たちの住むまちを知ろう」、「妻有・十日町地方の心をさぐる」、「妻有の人物史Ⅰ」、「妻有の人物史Ⅱ」、「太平記からの贈物ー信濃川中流域の中世ー」、「十日町市史を読むⅠー江戸時代の社会と人々ー」、「十日町市史を読むⅡー近・現代の諸相ー」などが開催され、市史編さん関係者が講師となった（表5～表6）。郷土の歴史や文化に親しむことは、地域を知ることであり、ひいては郷土への愛着と地域に住む者としての自覚を育むことでもある。地域博物館ならではの活動ではあるが、当時の講師の多くが故人となっていることから、世代交代及び次世代育成が急務であることは、改めて言うまでもない。

（4）「十日町市歴史文化基本構想」と「十日町市文化財保存活用地域計画」

第二次十日町市総合計画後期基本計画において、基本方針2「活気ある元気なまちづくり」の政策4「誰もが自由に楽しく学び多様な文化にふれあえるまち」として、「文化財の保存と活用の推進」をあげている。十日町市固有の歴史や文化を保存するとともに、国・県・市の指定・未指定に関わらず、その価値を幅広く捉え、文化財を積極的に活用する。また、十日町市博物館を拠点に文化観光の推進に取り組み、地域文化の魅力を国内外に発信して地域活性化を図ること、を施策の方針に掲げている。この中で、具体的な施策として、文化財の保存と活用については、①十日町市歴史文化基本構想に基づき、有形・無形の各種文化財の保存と活用を図り、広く情報発信し、「誰もが多様な文化にふれあえるまちづくり」を推進する、②日本遺産に認定された地域の文化・伝統ストーリーを国内外に発信し、地域の特色や歴史的魅力を伝えるなど、観光や産業分野とも連携しながら、文化観光の推進を図る、③文化財の総合的な保存と活用を図るため、文化財保存活用地域計画の策定を検討する、とある（石原2022）。

十日町市歴史文化基本構想は、平成27（2015）年度から平成29（2017）年度の3か年で策定された。策定の目的について、「市域に分布する文化財に関して、各々の関連性や周辺環境も含めて総合的に把握し、市の歴史や風土の特徴を踏まえた方針の下、地域の歴史や文化の理解に欠くことのできない貴重な財産である文化財を、長期的かつ計画的に保存・継承・活用していく。そして、まちづくりに関連する市の他部局や市民と連携し

て各地域の個性あふれる魅力的なまちづくりを推進することを目的に、そのマスタープランとして、文化庁の策定指針に基づき文化財に関する基本的・総括的な構想となる「十日町市歴史文化基本構想」を策定する」とある（十日町市教育委員会文化財課編2018）。この間に、既刊文献調査、アンケート調査、「雪と人々の暮らし」についての聞き取り調査、校歌・校章・名札の収集、現地調査などが行われている。

「究極の雪国とおかまちー真説！豪雪地ものがたりー」というストーリーが、令和2（2020）年6月に日本遺産認定を受けている。同年11月には、文化観光推進法に基づく十日町市の地域計画が国の認定を受けた。文化観光推進法は、文化についての理解を深める機会を充実させることで国内外からの観光客の来訪を促進し、文化観光の振興や地域の活性化を図る目的で令和2（2020）年5月に施行されている。十日町市の地域計画では、令和2（2020）年度～令和6（2024）年度の5年間にわたり、市内5つの文化観光拠点施設（新博物館、越後妻有交流館キナーレ、まつだい雪国農耕文化村センター「農舞台」、越後松之山「森の学校」キョロ口、清津峡溪谷歩道トンネル）と市内に点在する文化資源を結びつけた事業を実施する計画となっている（石原2022）。

本市の文化財に関する基本的・総括的なマスタープランである「十日町市歴史文化基本構想」を踏まえ、そのアクションプランとなる「十日町市文化財保存活用地域計画」が、令和4（2022）年度～令和5（2023）年度の2か年で策定され、令和6（2024）年7月に国の認定を受けている。「計画期間は、令和6（2024）年度から令和15（2033）年度までの10年間とし、上位計画である十日町市総合計画の内容の変更により、本計画と不整合が生じた場合や文化財を取り巻く社会的要因の変化、調査・整備等の進展、財政状況、また計画に搭載した事業の進捗状況等も踏まえ、必要に応じて見直しを行うものとする」としている（十日町市教育委員会文化財課編2024）。

3. 文化財施設の整備と活用

（1）博物館の機能

「博物館ハ世界中ノ物産、古物、珍物ヲ集メテ人ニ示シ、見聞ヲ博クスルタメニ設ケルモノナリ」これは、福澤諭吉が「西洋事情」で記した一節である。福澤は1862年に遣欧使節団の一員としてフランス、イギリス、オラ

ング等を視察し、わが国に「博物館」の意味を初めて伝えたと言われている。「集メテ（＝収集）人ニ示シ（＝展示）、見聞ヲ博クスル（＝教育）」という表現は正能的を射ている。博物館法第1章第2条で、「博物館」は「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管し、展示して、教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」と定義されている。博物館を教育機関とする所以はここにある。教育機関としてのあり方とは別に、博物館法において博物館は研究機関であると規定している。博物館法第3条第1項には、その四に博物館の事業として「博物館資料に関する専門的、技術的な調査研究を行うこと」を掲げ、博物館の調査研究の重要性を述べている。この専門的な調査研究の担い手は学芸員である。学芸員については、博物館法第4条第3項に、博物館の専門的職員としての学芸員の位置付けが規定され、同第4項には「学芸員は、資料の収集、保管、展示及び調査研究をはじめ専門的事項をつかさどる」として、博物館の専門的な調査研究が主として学芸員に委ねられていることが明記されている（石原 2022）。

（2）博物館の世代論

伊藤寿朗は、第二次世界大戦後から1980年代までの博物館を大きく3つの世代に分けて説明した（伊藤 1991）。【第一世代の博物館】は「保存」を重視した博物館であり、「国宝や天然記念物など、稀少価値をもつ資料（宝物）を中心に、その保存を運営の軸とする古典的博物館」があげられる。そこではつねにモノが中心にあり、その保存が博物館の第一義的な目的となる。博物館法制定（1951）以前に成立した博物館や個人を顕彰した記念館などが該当する。【第二世代の博物館】は「公開」を重視した博物館であり、「資料の価値が多様化するとともに、その資料の公開を運営の軸とする現在の多くの博物館」があげられる。1960年代末から開館した県立博物館や中規模の市立博物館などが該当する。【第三世代の博物館】は「参加・体験」を重視した博物館である。当時、伊藤は「（第三世代は）社会の要請にもとづいて、必要な資料を発見し、あるいはつくりあげていくもので、市民の参加・体験を運営の軸とする将来の博物館」とし、1980年代前後に開館した博物館を対象とした。しかし、「第三世代とは期待概念であり、典型と

なる博物館はまだない」としている。

それから20年経過し、21世紀を迎えて日本博物館協会は「対話と連携の博物館」という報告書をまとめた。ここに伊藤の第三世代を継承する【第四世代の博物館】として「対話と連携の博物館」がスタートすることになる。それは、「市民の参加・体験を深化させるため、博物館活動に関わる全ての『ひと・もの・こと』と対話し、連携する博物館」といえる。現在では、【第五世代の博物館】として「対話と連携を深化させ、さらに設置理念を再認識し、機能的分化の強化を図ると共に、地域振興・観光・教育・福祉と協働しながら利用者をもてなす複眼的な博物館」という考え方をする研究者もいる。

文部科学省は、「社会教育行政に必要な社会教育に関する基本的事項を明らかにすること」を目的として、3年ごとに社会教育調査を実施している。直近となる2021（令和3）年度調査結果では、博物館数（博物館登録施設、相当施設、類似施設）は5,771館（2018年度調査では5,738館）であった。全国では1市町村に平均3.3館の博物館があることになる。学芸員数は9,036人（2018年度調査は8,403人）であった。前回調査から数は増加しているが、正規職員の割合が減少し、非正規職員の割合が増加する傾向にある。

（3）新博物館のめざす姿

第二次十日町市総合計画後期基本計画において、文化財施設の整備と活用について①十日町市博物館を歴史や文化にふれる文化観光の拠点として位置付けるとともに、縄文文化や日本遺産ストーリー関連施設の整備を行い、世界に向けてその魅力を発信する、②博物館の収蔵物などの文化財や、他館所蔵の国宝などの優良な文化財を活用した企画展を開催し、市民への教育普及活動を積極的に行う、③国宝出土地である笹山遺跡を中核に、国史跡「田沢・壬遺跡」や県指定「野首遺跡出土品」などの縄文遺跡の保存や活用を図る。また、「生きた歴史体感プログラム」など縄文時代を体験・体感できる、ソフトプログラムを充実させる、とある（石原 2022）。

新博物館は、かけがえのない地域の財産である「国宝・笹山遺跡火焰型土器群をはじめとした縄文文化」と「古代にまで歴史がさかのぼる織物文化」、これらを生み出す原動力となった「雪と信濃川の恵みと文化」を守り継承して、その魅力を国内外に広く情報発信する施設である。新博物館の使命として①市民の知的関心に応えるため、資料や情報を収集・保管、調査・研究、展示・普及

し、生涯学習の拠点としてその役割を果たす、②地域の歴史や文化に対する市民の理解を深め、より良い未来に向かって市民と共に新しい価値を創造する、③魅力ある財産として地域固有の歴史・生活文化・産業に光をあて、その活用を通じた来館者との交流により地域振興に貢献する、④市民及び来館者と対話しながら共に成長し、博物館友の会、他の博物館・関係機関と連携して活動する、の4点があげられている。新博物館の機能として、「展示」、「教育普及」、「資料収集・保存」、「調査研究」、「情報発信・公開」、「施設の管理・運営」、「ホスピタリティ」の7項目があげられている（十日町市博物館編 2020）。新博物館の基本理念、ビジョン、使命、機能に沿うよう活動を活発に展開するとともに、文化財の保存と活用の計画的な推進を図っていく必要がある。7項目の機能の中では、「調査研究」、「情報発信と公開」が喫緊の課題であることは、以前にも指摘したとおりである。

新博物館の展示事業には企画展、特別展、特設展示のほか、まちの文化歴史コーナー HAKKAKE の展示などがある（表4、表9など）。企画展、特別展では常設展で表現できない部分を補うとともに、地域の歴史や文化にとって重要なテーマを選んで年数回開催している。博物館にとって生命線であり、調査研究に裏打ちされたものでなければ「意味」がなく、「深み」のない薄っぺらいものになることは改めて言うまでもない。また、美術展等の開催などが今後の課題と思われる。

調査研究を継続的にに行い、新たな事実や価値を博物館活動に反映していくことが重要である。また、誰もが調べることができる生涯学習の拠点として情報を発信し、収集した地域資料や図書、調査研究の成果であるデータベースなどの公開に向け、さらなる努力を重ねていく必要がある。

4. おわりに

縁あって十日町市博物館に就職し、もう少して40年が経とうとしている。笹山遺跡をはじめ幅上遺跡、樽沢開田遺跡、貝野沢田遺跡など200を超える遺跡の発掘調査や整理調査とともに、市史編さん事業、博物館の展示・講座・講演会など、多くの普及啓発活動に携わる機会を得た。笹山遺跡出土品の重要文化財指定や国宝指定、田沢・壬遺跡の国史跡指定に関わることができたのも幸いなことであった。

これまでの間に、阿部恭平、阿部敬、今井哲哉、小熊

博史、小野昭、貝瀬香、笠井洋祐、金子和宏、川村知行、木村英祐、久保禎子、小林隆幸、小林昌二、小林達雄、小林徳、佐々木榮一、佐藤信之、佐藤雅一、眞田岳彦、佐野芳隆、菅沼亘、竹内俊道、高木公輔、高橋由美子、滝沢栄輔、立木宏明、角田由美子、中村由克、新田康則、橋本博文、原田昌幸、林真子、平山育夫、廣野耕造、星野元一、松村実、宮尾亨、山田正毅、山本哲也の各氏をはじめ、多くの方々よりご指導・ご教示をいただいた。また、故人となられたが、赤澤計真、甘粕健、石澤寅義、今福利恵、大島伊一、岡田稔、上村政基、小島俊彰、小林宏行、佐野良吉、島田靖久、須藤重夫、滝沢秀一、田村喜一、田村達夫、土肥孝、戸田哲也、富澤孝之、中澤幸男、波形卯二、樋熊清治、平野幸作、廣田永二、藤本強、丸山克己の各氏から種々ご教示をいただいた。文末ではあるが記して厚くお礼申し上げる。

なお、紙数に限りがあるため調査研究活動における埋蔵文化財資料や合併前の旧町村所蔵資料などの調査成果と地域博物館の関わりについては稿を改めて検討の機会をもちたい。十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書（9～75集）をはじめ引用・参考文献の多くを割愛した。お許しいただきたい。（2025年3月10日脱稿）

引用・参考文献

- 佐野良吉 1982『随想妻有郷―十日町地方の歴史と民俗―』国書刊行会
- 佐野良吉 1990『妻有郷の歴史散歩』国書刊行会
- 佐藤雅一 2007『地域造りとしての文化財の保護と活用』『魚沼新報』
＜ダイジェスト版＞
- 安高啓明 2014『歴史の中のミュージアム―驚異の部屋から大学博物館まで―』昭和堂
- 石原正敏 2010『豪雪地帯に生まれた文化―火焰型土器の世界―』『知っておきたい新潟県の歴史』新潟日報事業社
- 石原正敏 2015『「火焰型土器のクニ」から―笹山遺跡の土器、土製品や石器類』『東北学 05』はる書房
- 石原正敏 2018『国宝「火焰型土器」の世界 笹山遺跡』新泉社
- 岩城卓二・高木博志編 2020『博物館と文化財の危機』人文書院
- 石原正敏 2022『ミュージアム・マネジメントの実践（1）―新十日町市博物館の取り組み―』『十日町市博物館研究紀要 第1号』
- 石原正敏 2023『ミュージアム・マネジメントの実践（2）―新十日町市博物館の取り組み―』『十日町市博物館研究紀要 第2号』
- 石原正敏 2024『地域博物館を考える（1）―調査・研究と普及活動―』『十日町市博物館研究紀要 第3号』
- 竹内俊道 2002『地域に根ざした博物館活動を目指して』『博物館研究』第37巻第6号 日本博物館協会
- 丸山克己・佐野芳隆 1998『文書資料の管理と活用―パソコンを利用した資料検索の試み―』『文化財課年報2』十日町市教育委員会文化財課
- 新潟県教育委員会編 1958『新潟県文化財年報3 妻有郷―新潟県中魚沼郡学術調査報告書』

表1 旧博物館と新博物館の入館者数の比較

年 度	大 人		小 人		合 計 () 内団体数	備 考
	個人	団体 (数)	個人	団体 (数)		
昭和54 (1979)						
昭和55 (1980)						
昭和56 (1981)	7,401	8,215 (235)	3,387	1,997 (43)	21,000 (278)	
昭和57 (1982)	10,309	6,108 (226)	3,875	2,841 (56)	23,133 (282)	
昭和58 (1983)	10,291	5,651 (205)	2,854	2,478 (52)	21,274 (257)	
昭和59 (1984)	11,396	7,574 (205)	2,383	2,273 (34)	23,626 (239)	
昭和60 (1985)	7,266	5,559 (179)	3,120	1,370 (29)	17,275 (208)	
昭和61 (1986)	8,787	5,700 (205)	6,755	3,551 (57)	24,793 (262)	
昭和62 (1987)	7,434	6,637 (219)	3,904	2,030 (40)	20,005 (259)	
昭和63 (1988)	10,274	4,718 (152)	3,207	1,869 (35)	20,068 (187)	
平成元 (1989)	11,442	3,850 (123)	3,538	1,972 (41)	20,802 (164)	
平成2 (1990)	10,166	3,075 (126)	2,191	1,116 (22)	16,548 (148)	
平成3 (1991)	9,899	5,837 (189)	3,297	1,819 (38)	20,852 (227)	
平成4 (1992)	10,460	4,908 (126)	3,099	2,138 (46)	20,605 (172)	
平成5 (1993)	10,074	4,958 (134)	3,268	1,943 (45)	20,243 (179)	
平成6 (1994)	9,678	2,889 (94)	2,956	1,623 (41)	17,146 (135)	
平成7 (1995)	11,979	3,819 (115)	2,365	1,879 (53)	20,042 (168)	
平成8 (1996)	11,255	4,592 (124)	2,011	1,598 (40)	19,456 (164)	
平成9 (1997)	12,890	4,467 (130)	1,641	2,258 (62)	21,256 (192)	
平成10 (1998)	13,718	2,985 (85)	1,803	1,350 (33)	19,856 (118)	
平成11 (1999)	21,337	5,540 (159)	2,811	3,394 (65)	33,082 (224)	
平成12 (2000)	15,252	5,150 (134)	1,886	2,072 (49)	24,360 (183)	
平成13 (2001)	12,162	3,365 (91)	1,561	1,903 (42)	18,991 (133)	
平成14 (2002)	11,368	2,230 (60)	1,720	1,429 (32)	16,747 (92)	
平成15 (2003)	11,313	2,981 (81)	1,624	1,495 (27)	17,413 (108)	
平成16 (2004)	8,568	2,715 (77)	1,470	1,075 (31)	13,828 (108)	
平成17 (2005)	10,829	1,458 (46)	1,398	2,431 (54)	16,116 (100)	
平成18 (2006)	14,322	2,771 (76)	1,776	2,627 (69)	21,496 (145)	
平成19 (2007)	11,663	2,384 (78)	1,356	3,294 (83)	18,697 (161)	
平成20 (2008)	10,617	2,261 (67)	1,519	2,668 (55)	17,065 (122)	
平成21 (2009)	12,766	1,969 (47)	1,840	2,141 (49)	18,716 (96)	
平成22 (2010)	10,778	1,431 (43)	1,964	1,661 (41)	15,834 (84)	
平成23 (2011)	9,511	1,169 (33)	1,542	1,508 (45)	13,730 (78)	
平成24 (2012)	15,493	1,138 (38)	2,001	1,630 (39)	20,262 (77)	
平成25 (2013)	11,241	806 (26)	1,250	1,461 (34)	14,758 (60)	
平成26 (2014)	12,518	768 (30)	1,063	1,510 (38)	15,859 (68)	
平成27 (2015)	15,552	1,114 (36)	1,636	1,344 (27)	19,646 (63)	
平成28 (2016)	12,636	1,232 (37)	1,164	1,405 (32)	16,437 (69)	
平成29 (2017)	12,033	962 (32)	1,251	1,126 (26)	15,372 (58)	
平成30 (2018)	13,198	780 (27)	1,374	1,045 (32)	16,397 (59)	
令和元 (2019)	9,537	1,042 (32)	1,195	566 (8)	12,340 (40)	
総 計	447,373	134,808 (4,122)	89,055	73,890 (1,645)	745,126 (5,767)	

年 度	一 般		中学生以下	合 計	備 考
	有 料	免 除			
令和2 (2020)	17,170	3,982	4,784	25,936	
令和3 (2021)	14,957	4,783	4,142	23,882	
令和4 (2022)	15,867	8,186	3,682	27,735	
令和5 (2023)	15,290	8,427	3,204	26,921	
総 計	63,284	25,378	15,812	104,474	

表2 資料の収集（平成26年度～令和5年度）

年度	件数	資 料 名
平成26年度	33	ショイダル、餅ののし板ほか、弓張り、ガリ版、オヒキガネほか、チョウナほか、雪まつりパッケージたばこ、中国紙幣ほか、おさなみ織の着物ほか、膳碗ほか、妙高山関山神社の火祭りのワラジ、着物の端切れ、バケツ、吸物椀ほか、蓄音機ほか、紋付の着物ほか、信濃川で使用したイカリほか、古書籍・千人針ほか、越後縮のミズトオシほか、写真データほか、帝国日本里程細図、一斗マスほか、ネクタイ、旧滝文資料、金子借用証文などの古文書、刀ほか、羽織ほか、旧睦織物で使用していた首里織帯の紋栓、中條平作家文書（仙田）、藕糸織、カケヤほか など
平成27年度	34	化粧まわしほか、タヌキ剥製ほか、軍隊手帳ほか、棒秤、香炉、漆塗り椀ほか、庚申供養道具ほか、天秤ばかりほか、雪下駄、従軍記章の證ほか、古書籍ほか、昔の洗濯機ほか、舟箱形シャトルほか、土地名寄帳ほか、『越能山都登』復刻版ほか、コモジチほか、ダイヤル式電話機ほか、昔の着物ほか、電気コタツほか、旧中里村関係古文書、昔の教科書ほか、掛軸「墨竹図」、浪曲のレコード、古文書・巻物、大賀一郎博士関連資料、蓄音機ほか、農家組合関係文書 など
平成28年度	29	農具ほか、昔の紙幣、昔のカメラ、足踏みミシンほか、ユキノコギリ、和紙の鯉のぼり、出征旗、ケシツボほか、着物、桶屋道具、頼母子講資料、昔の電気コタツ、日本刀ほか、箆笥、スクリーン型枠、掛軸、スゲボシ、尋常小学校唱歌テープ、旗、ガス炊飯器、シュロボシほか、屏風、古文書、明石ちぢみサンプル帳、茅葺民家写真、写真アルバムほか など
平成29年度	21	イットマスほか、棒バカリ、赤岩小学校歌資料、マジョリカお召ほか、昔の新聞、梵字Tシャツ、岩石・鉱物標本、ジザイカギほか、屏風、硯ほか、巾治家資料、モンベほか、雪ゲタほか、古文書・古典籍、書籍、ザグリ機ほか、版木ほか、駕籠ほか など
平成30年度	18	マジョリカお召ほか、ちゃぶ台ほか、庚申講道具、黒絵羽織ほか、古文書、倉俣小学校歌楽譜、来翰箱ほか、川西郷土読本ほか、火焰型土器模造品、古書籍ほか、ヤバサミ、昔の写真、生糸、掛軸、携帯白黒テレビ、紡織具 など
平成31年・令和元年度	11	着物（しぼり紺地長着、銘仙ほか）、庚申講道具、昔のステレオ、六角行燈、古文書 など
令和2年度	36	スッポン、コスギ、ロウソクタテ、ゼンマイ採り用着物、道仕切りの木札、原町五旗、松代地域の民話音声資料（カセットテープ）などの民俗・民具資料、黒絵羽織、紅型・小紋等の型染め資料、マジョリカお召・見本帳などの着物資料、雪景色・文化財・市内風景・祭りなどのポジフィルム及びプリントなど写真資料、飯山線開設関係文書・古文書・古典籍などの歴史資料、十日町小唄水墨画（中山晋平書・水谷八重子画）及び掛軸類など美術資料、十日町森林総合研究所観測記録及び中里養魚センター観測記録などの記録資料 など
令和3年度	116	民具資料（文政十三年間棟札、川舟の櫓、イカリ、シュロボシ、スカリ、スッペ、高下駄、炭火アイロン、蓄音機、SP盤レコード、コリントゲームなど）、十日町産地の着物資料（十日町明石ちぢみ、マジョリカお召、黒絵羽織、縫取縮緬など）、芸能関係資料（上川手歌舞伎上演用具、中尾○面神楽上演用具）、美術資料（永井白渥筆・十日町小唄歌詞掛軸、中山龍次筆・諏訪大神掛軸、明屋有照画賛・太子講掛軸）、古文書等歴史資料（安養寺・古澤家資料、上野・星名家資料、上蝦池・庄屋家資料、清水村・庄屋家資料など）、昔の写真及び写真画像CD（十日町雪まつりなど）、十日町森林研究所研究員資料（記録写真・日記・書簡等一括） など
令和4年度	40	考古資料（土器・石器）、古文書（縮問屋松村屋御召縮資料、正覚院資料、高島村庄屋家文書）、民具（酒徳利コレクション、百万遍の数珠・鉦等一式、越後縮生産用具など）、着物資料（マジョリカお召の反物、昭和20～30年代の織物見本切綴）、絵画（明屋有照賛仏画掛軸） など
令和5年度	23	古文書等歴史資料（東善寺・喜多庄屋家文書、山本遠山森林生産組合資料、宮下町水車六人衆資料）、民具（明治31年牧畑集落十二神社幟旗、大白倉高札、水沢商家資料、庚申講資料、花見用携行重箱）、着物資料（御召細目格子縮緬、紬紵） など

表3 これまでに開催された企画展・特別展（移動展・巡回展を含む）（1）

年 度	特別展・企画展等の名称（期間）
昭和54（1979）	「越後のちぢみ展」（4/27～5/20）、「木の文化展」（8/4～31）、「星裏一遺作展」（10/12～14）、「菊と刀展」（10/27～11/4）、「雪の民具展」（2/7～29）
昭和55（1980）	「明石ちぢみ展」（5/1～6/8）、「新潟県の画家たち展」（8/9～17）、「庚申さまと庚申信仰展」（10/26～11/9）、「雪と雪の民具展」（2/13～22）
昭和56（1981）	「越後ちぢみと明石ちぢみ展」（5/3～6/7）、「日本の郷土玩具展」（11/1～8）
昭和57（1982）	「妻有の画人たち展」（8/25～29）、「妻有の文化財展」（10/30～11/7）
昭和58（1983）	「妻有の衣食住展」（8/10～31）、「近代日本洋画の巨匠たち展」（11/1～6）
昭和59（1984）	「日本画、洋画、巨匠たちの世界展」（9/1～5）、「明治、大正、昭和100枚の写真展」（10/20～11/4）、「目で見える十日町の歴史展」（11/11・中条公民館新座分館、2/8～17・下条公民館）
昭和60（1985）	「広重・東海道五十三次展」（9/1～5）、「全日写連写真展」（10/3～6）、「戦中・戦後のくらし展」（11/22～12/8）、「雪の造形写真展」（11/3・中条公民館大井田分館）
昭和61（1986）	「重文・越後縮資料展」（4/10～7/20）、「世界の大昆虫展」（8/26～9/7）、「女性をえがく展」（10/8～12）、「明治・大正・昭和写真展」（11/2～3・水沢公民館）
昭和62（1987）	「大正浪漫明石ちぢみの世界展」（4/9～5/17）、「信濃川の魚と漁法展」（8/23～27）、「妻有の画人たち展Ⅱ」（10/17～25）、「雪の中のくらし写真展」（2/12～14）、「小坂遺跡と縄文人のくらし」（10/25・吉田公民館鑑島分館）
昭和63（1988）	「冬の生活用具展」（4/30～5/29）、「デザイン亀倉雄策展」（8/21～28）、「市史編さん資料展」（10/8～16）、「越後縮名品展」（2/10～12）、「昔のくらし写真展」（10/23・吉田公民館名ヶ山分館）、「水沢地域の城と館と遺跡展」（11/3～6・水沢公民館他）
平成元（1989）	博物館開館・友の会設立10周年記念「池田満寿夫展」（10/21～29）、「妻有の百三十三番写真展」（11/5～12・水沢公民館他）
平成2（1990）	「妻有の職人と道具展」（4/28～5/20）、「市史編さん資料展－近世妻有俳諧と系譜展－」（8/11～9/2）、「雪の造形と文様展」（10/13～21）、「幅上遺跡速報展」（11/3・吉田公民館鑑島分館）
平成3（1991）	「十日町の積雪期用具展」（8/11～9/1、2/8～16）、「大新田遺跡の調査記録」（10/27・鑑島小学校）
平成4（1992）	「積雪期用具展」（4/25～5/31）、「竹久夢二展」（10/10～26）
平成5（1993）	「星裏一とスノリア展」（6/5～20）、「浮世絵名品展－中右コレクション」（10/9～25）、「カウカ平A・B遺跡・高島南原A・B遺跡調査記録」（10/31・鑑島小学校）
平成6（1994）	開館・友の会設立15周年／市政施行40周年記念「棟方志功展」（10/8～23）、「高橋喜平・雪の造形写真展」（2/16～20）、「中道・思川遺跡の調査」（10/30・真田小学校他）
平成7（1995）	「手工芸の美－編・組・刺繍三人展」（6/17～7/2）、「富士の写真家・岡田紅陽生誕100年記念展」（10/7～22）、「上梨子A・B遺跡調査」（11/5・西小学校）
平成8（1996）	「発掘調査速報展－平成3～7年度分」（6/15～30）、「縄文の美－火焰土器の系譜」（9/28～10/27）
平成9（1997）	「十日町の文化財展」（5/17～6/8）、「中条地区の遺跡調査」（10/25～26・中条小学校）
平成10（1998）	「インド先住民民族アート展」（ミティラー美術館共催・4/17～5/5）、「妻有のいしぶみ展」（10/6～11/15）、「第50回雪まつり記念「高橋喜平写真展－雪花譜」（2/19～21）
平成11（1999）	笹山遺跡出土品国宝指定記念「縄文の美パートⅡ－火焰型土器の世界」（8/21～10/10）
平成12（2000）	「縄文の祭祀」（9/22～10/22）、「くらしの美 思い出の品々」（2/16～18）、「笹山遺跡とその出土品展」（6/3～4）
平成13（2001）	「民具からみた縄文の用具1－編・織用具と装身具－」（6/2～24）、「民具からみた縄文の用具2－食料調達と食事の用具－」（9/22～10/14）、「博物館収蔵資料展－越後縮を中心として－」（2/15～17）、「野首遺跡展」（11/4・下条公民館上新田分館）
平成14（2002）	「現代アートに挑戦するインド民族アートの世界展」（ミティラー美術館共催・4/26～5/19）、「きものでつづる十日町の歩み」（6/15～30）、「雪文化三館提携10周年記念「北越雪譜と魚沼の風土」（10/26～11/10）、「博物館収蔵資料展－十日町のきものから－」（2/14～16）
平成15（2003）	全国大井田氏サミット10周年記念「大井田健一 父祖の地を描く」（5/17～6/8）、「大地の芸術祭協賛「大地の息吹き－十日町の火焰型土器－」（7/20～9/7）、「きもの歴史館開館記念「越後縮の文様と美」（10/4～28）、「収蔵資料展－暮らしを彩る着物と品々－」（2/20～22）
平成16（2004）	国宝指定5周年記念「国宝と地域の宝物－十日町の火焰型土器Ⅱ－」（6/1～30）、「博物館と友の会の四半世紀」（7/10～25）、「市制施行50周年記念「十日町市50年の歩みと暮らし」（9/29～11/3）、「火焰街道博学連携プロジェクト「子ども縄文研究展」（11/21～12/25）

表4 これまでに開催された企画展・特別展（移動展・巡回展を含む）（2）

年 度	特別展・企画展等の名称（期間）
平成17（2005）	「女性の着物と装いー髪飾り・櫛と簪と笄とー」（6/11～7/3）、「博物館収蔵資料展ー生活用具を中心にー」（8/9～21）、「カストリ雑誌・戦後出版文化の一断面ー西潟浩平コレクションー」（8/9～21）、「新・十日町市の宝物ー地域に息づく文化財ー」（10/8～11/6）、「子ども縄文研究展」（11/20～12/4）
平成18（2006）	「越後の布ー暮らしの中の着物ー」（7/22～9/10）、「梵字・曼荼羅展」（10/7～22）、「子ども縄文研究展」（11/23～12/6）、「博物館収蔵資料展ーきものと資料と孔版画ー」（2/16～18）
平成19（2007）	「十日町のやきものー縄文時代草創期、火焰型土器、そして妻有焼へー」（8/25～9/24）、「残された雪国の記憶ー雪国の暮らしを写すー」（10/6～11/4）、「出土品が語る新潟の歴史」（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団共催・11/10～12/9）、「子ども縄文研究展」（12/22～1/14）、「博物館収蔵資料展ー軸物を中心にー」（2/16～18）
平成20（2008）	「十日町市の中世遺跡ー発掘された集落・居館ー」（8/12～9/15）、「岡田紅陽富士写真展」（10/11～26）、「博物館に寄託・寄贈された考古資料」（11/8～24）、「子ども縄文研究展」（12/20～1/12）、「博物館収蔵資料展ー着物を中心にー」（2/20～22）、「雪文化三館提携事業「雪と人が織りなす文化」（9/13～15・長岡市中央図書館）
平成21（2009）	博物館開館・友の会設立30周年記念「縄文人の道具箱 野首遺跡展」（8/1～9/13）
平成22（2010）	「壊されるモノー土偶・石棒・石皿からみた縄文の祭祀ー」（7/31～9/5）、「信濃川上・中流域の縄文時代草創期遺跡」（11/2～28）
平成23（2011）	「縄文のKAZARIー顔を飾る縄文人ー」（7/30～9/11）、「十日町市内遺跡発掘調査速報展」（11/26～3/25）
平成24（2012）	「四大麻布ー越後縮・奈良晒・高宮布・越中布の糸と織りー」（7/21～8/19）、「異形の縄文土器」（9/22～11/4）、「昭和の残映ー博物館に寄贈された昔の資料ー」（2/2～3/3）、「縄文の華 十日町市の国宝・火焰型土器展」（8/3～9/30・星と森の詩美術館）
平成25（2013）	「箱の中の虫ー昆虫博士・樋熊清治氏標本コレクションー」（7/20～8/25）、「ビジュアル縄文博物館ー縄文人の衣食住、そして土器ー」（9/21～11/10）、「子ども縄文研究展2013」（1/18～2/16）
平成26（2014）	博物館開館・友の会設立35周年記念「松代の石仏ー里山の祈りと信仰ー」（7/19～8/24）、「縄文前期のムラ 赤羽根遺跡ー火焰型土器の出現前夜ー」（9/27～11/9）、「子ども縄文研究展2014」（1/17～2/15）
平成27（2015）	「カストリ雑誌とその時代ー西潟浩平氏コレクションー」（7/25～8/30）、「縄文後期の墓 栗ノ木田遺跡ー縄文人の死と弔いー」（10/3～11/8）、「子ども縄文研究展2015」（1/16～2/21）
平成28（2016）	「館蔵資料展 市民からの贈り物」（7/30～8/28）、「土器づくりの考古学」（10/1～11/6）、「子ども縄文研究展2016」（1/14～2/19）
平成29（2017）	「野首遺跡出土品のすべて」（7/8～8/27）、「新潟県埋蔵文化財センター巡回展「縄文の造形美ー六反田南遺跡ー」（7/8～8/27）、「動物の意匠ー人と生き物のかかわりー」（9/30～11/5）、「雪文化三館提携25周年記念展「雪と生活」（9/14～11/20）、「子ども縄文研究展2017」（1/20～2/18）、「十日町のきもの歴史展」（5/3～4・十じろう）、「野首遺跡出土品展」（11/5・下条中学校）
平成30（2018）	「十日町のきもの歴史展」（5/8～27）、「縄文土器繚乱ー十日町市の土器いろいろー」（7/28～8/26）、「機織りのムラ 馬場上遺跡」（9/29～11/4）、「子ども縄文研究展2018」（1/4～2/17）、「十日町のきもの歴史展」（5/3・十じろう）
令和元（2019）	「十日町のきもの歴史展」（5/8～26）、「博物館開館・友の会設立40周年記念「博物館と友の会 40年の歩み」（7/27～9/16）、「十日町のきもの歴史展」（5/3・十じろう）
令和2（2020）	新館オープン記念夏季企画展「国宝・笹山遺跡出土深鉢形土器のすべて」（6/1～8/23）、「新館オープン記念秋季特別展「縄文の遺産ー雪降る縄文と星降る縄文ー」（9/26～11/8）、「特設展示「昔の道具」（12/19～1/24）、「冬季企画展「マジョリカお召と黒絵羽織」（2/13～3/28）
令和3（2021）	新館オープン1周年記念夏季特別展「形をうつすー文化財資料の新たな活用ー」（6/1～7/4）、「夏季企画展「器の移り変わりー縄文から現代までー」（7/27～8/29）、「新館オープン1周年記念秋季特別展「岡本太郎が見て、撮った縄文」（10/2～11/14）、「特設展示「昔の道具」（1/4～2/6）、「冬季企画展「明石ちちみと十日町小唄」（2/19～3/27）
令和4（2022）	春季企画展「市民からの贈り物」（4/29～6/5）、「夏季企画展①「里山の石仏ー松之山の祈りと信仰ー」（7/23～8/28）、「夏季企画展②雪文化三館30周年記念特別展「モノと芸術とヒトが織りなす雪国文化」（9/6～9/25）、「本ノ木・田沢遺跡群国史跡指定3周年記念秋季特別展「縄文時代の始まりを探る」（10/1～11/13）、「特設展示「昔の道具」（1/4～1/29）、「冬季企画展「雪国の食べものがたり」（2/18～3/26）
令和5（2023）	夏季企画展「縄文の宝石ーヒスイー」（7/22～8/27）、「秋季特別展「笑う縄文人ー縄文人の喜怒哀楽ー」（9/30～11/12）、「特設展示「昔の道具」（1/4～1/28）、「冬季企画展「究極の雪国 建ものがたり」（2/17～3/24）
令和6（2024）	夏季企画展「すべて見せます！「国宝の土器」」（6/1～8/25）、「秋季特別展「JAPANのルーツー雪降る縄文と世界遺産ー」（9/28～11/10）、「特設展示「昔の道具」（1/4～2/2）、「冬季企画展「マイコレクション」（2/15～3/23）

表5 これまでに開催された博物館講座(1)

年 度	博物館講座のテーマ・日時・演題・講師(敬称略、所属は当時)
昭和60(1985)	十日町を知る ① 6/12「考古学から見た十日町」阿部恭平(十日町市博物館学芸員)、② 6/28「信濃川と河岸段丘—十日町の地勢—」仲野浩平(津南中学校教諭)、③ 7/9「十日町織物の歴史と文化」佐野良吉(十日町織物工業協同組合参与)、④ 8/30「十日町の文化財と織物工場視察」佐野良吉(同)、⑤ 9/10「子供と民俗行事」駒形駈(川西高校校長)、⑥ 10/8「十日町の雪の記録から(雪の科学—十日町の雪の特徴—)」渡辺成雄(林業試験場十日町試験地主任)、⑦ 11/19「雪処理の科学技術—雪国の今日と明日—」栗山弘(科学技術庁国立防災科学技術センター雪害実験研究所)、⑧ 12/3「学校教育と博物館」竹内俊道(十日町市博物館学芸員)
昭和61(1986)	十日町を知るⅡ ① 4/22「博物館と学校教育」竹内俊道(十日町市博物館学芸員)、② 5/9「越後縮資料は語る」滝沢秀一(十日町市博物館調査研究員)、③ 5/21「十日町の城跡」丸山克己(十日町市史編さん室主査)、④ 6/10「十日町織物の歴史と現況—織物工場視察—」佐野良吉(十日町織物工業協同組合参与)、⑤ 7/9「信濃川の水害と治水」須藤重夫(十日町市史編さん委員)、⑥ 8/29「秋山の民具と河岸段丘—津南方面視察—」仲野浩平(津南中学校教諭)、⑦ 9/4「昆虫の世界」滝沢伸介(日本アジア虫の会)、⑧ 11/5「雪国の生活—今と昔—」渡辺成雄(前林業試験場十日町試験地主任十日町)・駒形駈(川西高校校長)・星名甲子郎(雪と生活研究会幹事長)
昭和62(1987)	自分たちの住む町を知ろう ① 6/27「武士の戦いと日常(上杉時代の妻有)—城館跡を訪ねてⅠ—」丸山克己(十日町市史編さん室主査)、② 7/11「新田一族の進出と妻有地方の中世」佐野良吉(十日町織物工業協同組合参与)、③ 7/25「遺跡が語る大昔のくらし—原始から古代へ—」大島伊一(十日町市文化財保護審議会委員)、④ 8/1「幕藩体制と妻有の村々」須藤重夫(十日町市史編さん委員会近世史部会長)、⑤ 8/8「妻有の大地はどのようにしてできたか—信濃川と河岸段丘の形成—」仲野浩平(津南中学校教諭)、⑥ 8/29「村と庄屋と庶民たち」上村政基(十日町市史編さん委員会近・現代史部会長)、⑦ 9/5「大井田氏とその周辺—城館跡を訪ねてⅡ—」佐野良吉(十日町市史編さん委員会副委員長)・丸山克己(十日町市史編さん室主査)、⑧ 9/19「会津戦争と妻有の人々」金子幸作(川西町教育委員長)
昭和63(1988)	妻有・十日町地方の心をさぐる ① 5/14「自然の中の神々—自然と人々—」桜井徳太郎(十日町市史監修者・駒沢大学学長)、② 5/21「妻有地方の野仏たち—人々の願い①—」上村政基(十日町市史編さん委員・文化財保護審議会委員)、③ 5/28「妻有地方への仏教の広がり—人々の願い②—」竹内道雄(十日町市史編さん委員長・愛知学院大学教授)、④ 6/11「村の神さま—人々の願い③—」駒形駈(十日町市史編さん委員・文化財保護審議会委員)、⑤ 6/18「村の中の相互扶助—暮らしと助け①—」滝沢秀一(日本民俗学会会員・十日町市史編さん調査員)、⑥ 6/25「飢饉の中の救世主—暮らしと助け②—」本山幸一(十日町市史編さん調査員・中越教育事務所指導主事)、⑦ 7/2「妻有地方の教育のあけぼの—教育と文化①—」佐野良吉(十日町市史編さん副委員長・文化財保護審議会委員)、⑧ 7/9「戦後の文化を育んだ人々—教育と文化②—」田村喜一(十日町市博物館協議会副委員長・市史編さん調査員)
平成元(1989)	妻有の人物史Ⅰ ① 5/27「坂下門外で斃れた勤皇の志士—河本杜太郎(正安)—」佐野良吉(十日町市史編さん副委員長・文化財保護審議会委員)、② 6/3「諏訪山の天狗が庶民の悩みを代弁—服部泰庵—」上村政基(十日町市史編さん委員・文化財保護審議会委員)、③ 6/24「麻から絹へ、十日町織物再生の功労者—宮本茂十郎—」滝沢栄輔(十日町市博物館協議会委員長・市史編さん調査員)、④ 7/8「江戸の名医、現代漢方医学の祖—尾台良作(榕堂)—」須藤重夫(十日町市史編さん委員)、⑤ 7/22「学問振興と人材育成に尽くした教育者—高橋茂一郎(翠村)—」田村喜一(十日町市文化財保護審議会委員・市史編さん調査員)
平成2(1990)	妻有の人物史Ⅱ ① 7/14「十日町織物の近代化に尽くした人々—根津五郎右衛門・蕪木八郎右衛門—」佐野良吉(十日町市史編さん副委員長・文化財保護審議会委員)、② 7/21「多くの偉材を育てた学徳兼備の高僧惟寛和尚をとりまく人々—渡辺賢一(円通寺住職)—」③ 7/28「江戸相撲の名行司木村瀬平と幕末の相撲界」田村喜一(十日町市文化財保護審議会委員・市史編さん委員)、④ 8/4「日本三竹の1人と称された竹画の巨匠木村雪翁と大肝煎・関口家」上村政基(十日町市文化財保護審議会委員・市史編さん委員)、⑤ 8/11「近世妻有の俳諧の系譜をたどる—根津桃路・上村山之・青山幽嘯—」須藤重夫(十日町市史編さん委員)
平成3(1991)	時間(とき)の軌跡をたずねて ① 7/13「中世編—戦乱と武士(もののふ)たち—妻有の中世—」山田邦明(東京大学史料編纂所所員)、② 7/20「古代編—古代史のなかの越後と妻有—」小林昌二(新潟大学人文学部教授)、③ 7/28「原始編—縄文の生活様式—適応と創造—」渡辺誠(名古屋大学文学部教授)
平成4(1992)	雪の中の暮らしを考える ① 8/22「雪の科学と雪害の防止」中村勉(長岡雪氷防災研究所所長)、② 8/29「雪国の風土と文化」高橋実(小千谷高校教諭)、③ 9/5「雪とともに生きる暮らし」鈴木哲(新潟大学工学部教授)
平成5(1993)	戦国乱世の人物像 ① 8/7「戦国時代の妻有」山田邦明(東京大学史料編纂所所員)、② 8/14「描かれた中世—洛中洛外図の中の人々—」石田尚豊(聖徳大学教授)、③ 8/21「中世越後の豪族たち」阿部洋輔(新発田高校教諭)、④ 8/28「戦国大名とはなんだったのか」藤木久志(立教大学教授)
平成6(1994)	絵図面が語る郷土の歴史 ① 6/4「地図や絵図から歴史を読む」青山宏夫(新潟大学助教授)、② 6/11「絵図面に見る山の論争」木村秀彦(柏崎農業高校・高柳分校教諭)、③ 6/18「村絵図から見た河岸段丘の開発」松永靖夫(元三条高校教諭)

表6 これまでに開催された博物館講座(2)

年 度	博物館講座のテーマ・日時・演題・講師(敬称略、所属は当時)
平成7 (1995)	太平記からの贈物ー信濃川中流域の中世ー Ⅰ 学習ツアー 6/8～9「越後から鎌倉へー新田義貞の鎌倉攻めを追うー」佐野良吉(十日町市史編さん委員)、 Ⅱ 史跡探訪 7/22「関東への道」丸山克己(十日町市史編さん室室長補佐)、Ⅲ 講座(講義) ① 8/5「越後の新田一族ーその活躍と悲劇」赤澤計真(新潟大学文学部教授)、② 8/12「中世の武士(もののふ)たちー戦いのありさま」山田邦明(東京大学史料編纂所助教授)、③ 8/19「中世の精神世界へ①ー佛像・祈りのかたちー」西川新次(慶應義塾大学名誉教授)、④ 8/26「中世の精神世界へ②ー念仏・遊行の聖と民衆ー」大橋俊雄(日本文化研究所講師)
平成8 (1996)	縄文の技とところ ① 7/14「縄文からのメッセージー魅惑の真脇びとー」加藤三千雄(能都町真脇遺跡展示室)、② 7/28「縄文心象ー日蝕土器の系譜ー」武居幸重(諏訪縄文文化研究会)、③ 8/11「縄文生活の再現ー実験考古学入門ー」楠本政助(石巻考古学研究所)、④ 8/25「縄文人の共同性」後藤和民(創価大学教授)
平成9 (1997)	十日町市史を読むⅠー江戸時代の社会と人々ー ① 9/13「村の掟(おきて)ー村決でみる盗みへの制裁ー」本田雄二(長岡高校教諭)、② 9/20「善光寺街道と松之山街道」桑原孝(十日町市史編さん委員)、③ 9/27「縮間屋と奉公人」杉本耕一(新潟高校教諭)、④ 10/4「妻有俳諧の先駆者たちー上村山之と根津桃路ー」須藤重夫(十日町市文化財保護審議会委員)、⑤ 10/11「飢饉と村の生活ー農民たちの危機管理ー」本山幸一(十日町市史編さん委員)、⑥ 10/18「日記にみる農家の一年」松永靖夫(農学博士)、⑦ 10/25「山の利用と紛争ー六箇村の入会ー」木村秀彦(堀之内高校教諭)
平成10 (1998)	十日町市史を読むⅡー近・現代の諸相ー ① 7/25「自由民権運動と妻有の風土」本間恂一(新潟県政記念館館長)、② 8/1「十日町産地は大火の危機をどのように克服したかー染織学校の設立と中村喜一郎先生ー」佐野良吉(十日町市文化財保護審議会委員)、③ 8/8「はくはく線への長い道のりー鉄道誘致運動の苦闘」上村政基(十日町市文化財保護審議会委員)、④ 8/22「雪国のこどもたちーわらべ歳時記ー」駒形昶(新潟県民俗学会会長)、⑤ 8/29「娯楽の王様・映画と若者」田村喜一(十日町市文化財保護審議会委員)
平成11 (1999)	十日町市史を読むⅢー原始・古代・中世の十日町ー ① 7/24「火焰土器の時代ー笹山遺跡を中心にー」小熊博史(長岡市立科学博物館)、② 7/31「古代の人々のくらし」高橋勉(新井市教育委員会)、③ 8/7「越後の中世考古学と妻有郷の遺跡」鶴巻康志(新発田市教育委員会)
平成12 (2000)	縄文研究最前線ー縄文時代はここまでみえてきたー現代人のための縄文講座ー ① 7/29「縄文人の住環境ー縄文人の住居を調べるー」荒川隆史(財・新潟県埋蔵文化財調査事業団主任調査員)、② 8/5「縄文時代の生活復元ー縄文人の暮らしを見つめるー」渡辺裕之(新潟県立歴史博物館主任学芸員)、③ 8/12「縄文世界の精神風土ー縄文の記憶を追ってー」原田昌幸(文化庁美術工芸課文化財調査官)、④ 8/19「縄文人の交流と交易ー奥三面から見えてきたことー」高橋保雄(朝日村奥三面遺跡調査係長)
平成13 (2001)	モノと暮らしの知恵を学ぶー道具と技術を考えるー ① 7/28「石の利用法ー石器と石製品ー」前山精明(巻町教育委員会学芸員)、② 8/4「民具と道具」久保禎子(一宮市博物館学芸員)、③ 8/11「縄文時代の道具箱」宮尾亨(新潟県立歴史博物館学芸員)、④ 8/18「縄文の工芸技術」小柴吉男(三島町文化財専門委員)
平成14 (2002)	道・人と地域をつなぐものー地域と文化の交流を考えるー ① 7/27「善光寺街道をゆく人々」丸山克己(前十日町情報館長)、② 8/3「織物技術の伝播を追って」坂本育男(福井県立博物館学芸員)、③ 8/10「塩の道を歩く」土田孝雄(糸魚川市文化財保護審議会委員)、④ 8/17「海上の道ー交易と交流ー」藤本強(國學院大學教授)
平成15 (2003)	時の記憶を手がかりにー資料から歴史を読み解くー ① 7/26「仏像が語りかけるものーその心とかたちー」川村知行(上越教育大学助教授)、② 8/2「古文書から見えてくること」本井晴信(新潟県立文書館専門文書研究員)、③ 8/9「その後の大井田氏を追って」佐野良吉(新潟県民藝協会会長)、④ 8/23「石佛・石塔の分布は語るー地域の信仰と歴史ー」渡辺三四一(柏崎市立博物館学芸員)
平成16 (2004)	地域をつなぐ物語ー郷土の歴史と文化を訪ねてー ① 7/31「中里編 桔梗原の開田ー庄屋・村山家の人々ー」村山詔平(中里地域開発(株)マネージャー)、② 8/7「十日町編 縮間屋の台所事情」丸山克己(十日町市文化財保護審議会委員)、③ 8/21「川西編 板碑は語るー中世の世界ー」千々和到(國學院大學教授)、④ 8/28「松代・松之山編 松代・松之山の歴史散歩」鈴木栄太郎(上越市史編さん室専門員)
平成17 (2005)	地域をつなぐ物語Ⅱー郷土の歴史と文化を訪ねてー ① 7/23「新市域の自然と景観ーこの素晴らしき大地ー」井上信夫(十日町市文化財保護審議会委員)、② 7/30「新市域の街道と山城ー古い歴史を刻む大地ー」丸山克己(十日町市文化財保護審議会委員)、③ 8/6「川西・中里の文化財ー現地見学ー」星名寔(十日町市文化財保護審議会委員)、④ 8/20「松代・松之山の文化財ー現地見学ー」鈴木栄太郎(十日町市文化財保護審議会委員)
平成18 (2006)	災害の歴史から郷土を学ぶ ① 7/29「松之山の地すべりー大地が動くー」村山悦夫(松之山教育事務所社会教育指導員)、② 8/5「十日町の大火始末記ー焦土から立ち上がるー」佐野良吉(郷土史研究家)、③ 8/19「日本の大地震と郷土の人々ー大地が震えるー」須藤重夫(郷土史研究家)

表7 これまでに開催された博物館講座(3)

年 度	博物館講座のテーマ・日時・演題・講師(敬称略、所属は当時)
平成19(2007)	魚沼を学ぶ ① 7/21「魚沼の文化交流を探るー鈴木牧之の交友からー」貝瀬香(鈴木牧之記念館学芸員)、② 7/28「白の世界に魅せられてー富岡惣一郎と魚沼ー」高石真理子(トミオカホワイト美術館学芸員)、③ 8/4「魚沼の大地と火焰型土器ー故郷の縄文時代ー」石原正敏(十日町市博物館学芸員)
平成20(2008)	魚沼を学ぶⅡ ① 7/19「原始の魚沼ー縄文時代を中心にー」石原正敏(十日町市教育委員会)、② 7/26「古代の魚沼ー古墳時代を中心にー」安立聡(南魚沼市教育委員会)、③ 8/2「中世の魚沼ー魚沼地方の中世城館跡の特徴ー」鳴海忠夫(新潟県考古学会会員)、④ 8/9「魚沼楽(学)のススメ」佐藤雅一(津南町教育委員会)
平成21(2009)	大河ドラマ「天地人」を学ぶ ① 7/4「考古学的に見た坂戸城跡ー居館跡を中心としてー」藤原敏秀(南魚沼市教育委員会)、② 7/11「史料から探る直江兼続の妻おせん」田中洋史(長岡市立中央図書館文書資料室)、③ 7/18「会津120万石と「直江状」福原圭一(上越市総務課公文書館準備室)
平成22(2010)	新潟県の考古学最前線 ① 7/3「新潟県の縄文時代遺跡ー近年の発掘調査成果を中心にー」渡辺裕之(新潟県教育庁文化行政課)、② 7/10「弥生時代研究の現在(いま)」古澤妥史(阿賀野市教育委員会生涯学習課)、③ 7/17「越後で古墳が造られたところー魚沼地方の古墳人(びと)の暮らしー」尾崎高宏(財・新潟県埋蔵文化財調査事業団) 考古資料からみた十日町市の歴史 ① 9/18「縄文時代① 遺跡の調査からわかる縄文人のくらしー前・中期を中心にー」石原正敏(十日町市博物館学芸員)、② 10/2「中世 十日町に武士がいたところー中世の人々の暮らしー」菅沼亘(十日町市博物館学芸員)、③ 10/16「縄文時代② 土の器を作り始めた頃の十日町ー久保寺南遺跡を中心に佛像・祈りー」笠井洋祐(十日町市博物館学芸員)
平成23(2011)	新潟県の考古学最前線Ⅱ ① 7/2「発掘が語る古代の越後・佐渡」春日真実(財・新潟県埋蔵文化財調査事業団)、② 7/9「新潟平野の舟運から古代・中世の流通を復元するー近年の研究成果からー」鶴巻康志(新潟市教育委員会生涯学習課)、③ 7/16「越後における肥前陶磁器の流通」安藤正美(見附市教育委員会教育総務課)
平成24(2012)	郷土の遺産Ⅰ 越後縮 ① 6/16「越後縮の歴史」竹内俊道(前十日町市博物館長)、② 6/23「御用縮の世界ー受注から納品までー」丸山克己(十日町市文化財保護審議会委員)、③ 6/30「越後縮と江戸時代の麻布産地」吉田真一郎(近世麻布研究所)
平成25(2013)	郷土の遺産Ⅱ 自然 ① 6/15「段丘に記録されている自然災害を考える」ト部厚志(新潟大学災害・復興科学研究所准教授)、② 6/22「雪里・十日町市の特徴的な昆虫たち」鶴智之(越後松之山森の学校キョロロ研究員)、③ 6/29「多雪地の植物たちの多様な生き方とそのめぐみ」小林誠(越後松之山森の学校キョロロ研究員)
平成26(2014)	郷土の遺産Ⅲ 石仏 ① 6/14「下越の石仏と民俗行事」大楽和正(新潟県立歴史博物館研究員)、② 6/21「中越ぶらり石仏探訪ーぶらり出かけ、めぐりあった路傍の石仏あれこれー」桑原和位(つまり石仏の会会員)、③ 6/28「大光寺石と石仏」大坪晃(新潟県石仏の会会員)
平成27(2015)	郷土の遺産Ⅳ 火焰型土器 ① 6/13「科学の目で見る火炎土器」宮内信雄(十日町市博物館調査研究員)、② 6/20「火焰型土器のつくり方」宮尾亨(新潟県立歴史博物館専門研究員)、③ 6/27「美術から見た縄文土器ー火焰型土器の登場ー」鈴木希帆(東京国立博物館アソシエイトフェロー)
平成28(2016)	郷土の遺産Ⅴ 野首遺跡土器の魅力 ① 6/11「千曲川流域の土器のお手本ー長野県から見た野首遺跡出土土器ー」寺内隆夫(長野県立歴史館上席学芸員)、② 6/18「火炎土器と野首遺跡」寺崎裕助(新潟県考古学会会長)、③ 6/25「利根川上流域から見た野首遺跡中期土器群」山口逸弘(公財・群馬県埋蔵文化財調査事業団上席専門員)
平成29(2017)	郷土の遺産Ⅵ 雪 ① 6/10「北越雪譜を著した鈴木牧之」貝瀬香(南魚沼市図書館)、② 6/17「北越雪譜に見る雪国のくらし」笛木孝雄(南魚沼市文化財保護審議会会長)、③ 6/24「雪国の行事と食文化」大楽和正(新潟県立歴史博物館主任研究員)
平成30(2018)	郷土の遺産Ⅶ 信濃川 ① 6/9「信濃川と旧石器・縄文人の関わりについて」佐藤信之(津南町農と縄文の体験実習館なじょもん)、② 6/16「信濃川の河岸段丘ー変動する大地の証拠ー」竹之内耕(フォッサマグナミュージアム)、③ 6/23「信濃川の本造船について」森行人(新潟市歴史博物館みなとびあ)
令和元(2019)	郷土の遺産Ⅷ 編布と織布 ① 6/15「奥会津昭和村のカラムシ栽培ー日本各地と台湾の事例ー」菅家博昭(昭和村文化財保護審議会委員長)、② 6/22「縄文時代の編布ー織布以前を考えるー」松永篤知(金沢大学資料館特任教授)、③ 6/29「上杉謙信・景勝と青苧」福原圭一(上越市公文書センター上席学芸員)

表8 これまでに開催された博物館講座（4）

年 度	博物館講座のテーマ・日時・演題・講師（敬称略、所属は当時）
令和2（2020）	新型コロナウイルス感染症拡大のため中止
令和3（2021）	縄文を学ぶ ① 8/7「縄文造形を楽しむー縄文時代の社会交流ー」井出浩正（東京国立博物館 教育講座室長）、② 8/21「土器から縄文食を探る」宮内信雄（東京大学総合研究博物館 学術専門職員）、③ 8/28「土器の出現と縄文時代のはじまり」堤 隆（明治大学黒曜石研究センター 客員研究員）
令和4（2022）	究極の雪国を学ぶ ① 6/4「食から見る雪国の暮らし」大楽和正（新潟県立歴史博物館 主任研究員）、② 6/21「防寒着としての角巻」岩野笙子（新潟県民俗学会 理事）、③ 7/2「雪国の建築」平山育男（長岡造形大学 教授）
令和5（2023）	魚沼の歴史を学ぶ ① 6/10「歴史の道 八十里越」渡部浩二（新潟県立歴史博物館 専門研究員）、② 6/17「魚沼の狩猟」鈴木秋彦（新潟県民俗学会 理事）、③ 6/24「発掘調査成果からみた魚沼地域の古代について」春日真実（新潟県埋蔵文化財調査事業団 専門調査員）
令和6（2024）	北越雪譜を学ぶ ① 7/6「北越雪譜の怪異」高橋郁丸（新潟妖怪研究所 所長）、② 7/13「北越雪譜を学ぶ」貝瀬香（鈴木牧之記念館 学芸員）

表9 分じろう まちの文化歴史コーナー HAKKAKE の展示（2016～2024年度）

年 度	HAKKAKE の展示（期間）
平成28（2016）	「国宝・火焰型土器No.1 レプリカ」（4/下～6/3）、「国宝・火焰型土器No.5」（6/4～6/5）、「越能山都登」（6/6～7/1）、「長徳寺板碑」（7/2～10/3）、「枳倉式土器」（10/5～11/7）、「中島遺跡出土品その1」（11/9～2/13）、「中島遺跡出土品その2」（2/15～4/5）
平成29（2017）	「中島遺跡出土土器」（～5/2）、国宝・笹山遺跡出土品（5/3）、「中島遺跡出土土器」（5/4～5/29）、「十日町織物歴代見本帳」（5/31～7/31）、「縄文人の巨大ピアスー樽沢開田遺跡出土品ー」（8/2～9/22）、「国宝・笹山遺跡出土品」（9/23～9/24）、「中里地域の釜神さま」（9/25～11/27）、「チンコロと節季市」（11/29～1/28）、「カンジキ・スカリーー十日町の積雪期用具ー」（1/31～3/26）、「茂十郎の透綾ー宮本茂十郎手織の透綾（絹縮）裂地ー」（3/28～）
平成30（2018）	「茂十郎の透綾ー宮本茂十郎手織の透綾（絹縮）裂地ー」（～5/2）、「国宝・火焰型土器No.5」（5/3）、「国宝・火焰型土器No.1 高精細レプリカ」（5/4～5/6）、「茂十郎の透綾ー宮本茂十郎手織の透綾（絹縮）裂地ー」（5/8～5/28）、「威信の石槍ー向田遺跡出土品ー」（5/30～8/6）、「ツク（マブシ）とツク折り」（8/8～10/1）、「その硯は誰のものかー伊達八幡館跡出土品ー」（10/3～12/3）、「フクベ（夕顔瓢）ー十日町の積雪期用具ー」（12/5～2/4）、「ワダラ」（2/6～4/1）
令和元（2019）	「清田山発見のヒシナイイワシ化石」（4/3～5/2）、「国宝・火焰型土器No.5」（5/3）、「清田山発見のヒシナイイワシ化石」（5/4～6/3）、「十日町市最古の狩猟具」（6/5～8/5）、「十日町市最古の文字」（8/7～10/7）、「弥生の小壺」（10/9～12/9）、「国宝・火焰型土器No.6」（12/10）、「唐津焼」（12/11～1/9）、「国宝・火焰型土器No.7」（1/10）、「唐津焼」（1/11～2/14）、「国宝・火焰型土器No.8」（2/15～2/16）、「中世の貨幣」（2/17～3/9）、「国宝・火焰型土器No.9」（3/10）、「中世の貨幣」（3/11～）
令和2（2020）	「中世の貨幣」（～4/9）、「石で作った斧」（4/10～6/8）、「紡錘車」（6/10～8/3）、「カルカロドン歯の化石」（8/5～10/12）、「イッカク（一角）の角」（10/14～12/7）、「珠洲焼の壺」（12/9～2/8）、「縄文土器と蓋」（2/10～）
令和3（2021）	「縄文土器と蓋」（～4/5）、「縄文土器の中に入った縄文土器」（4/7～6/7）、「古墳時代の器の形」（6/9～8/2）、「越中富山の置き薬」（8/4～10/4）、「動物意匠のついた縄文土器」（10/6～12/6）、「マジョリカお召とマジョリカ陶器」（12/8～2/7）、「弥生時代の土器」（2/9～4/4）
令和4（2022）	「国宝・火焰型土器No.9」（5/3）、「着ものがたりー編布と織布ー」（5/11～7/11）、「建ものがたりー雪国建築の知恵ー」（7/13～9/12）、「食べものがたりー食料保存の知恵ー」（9/14～11/14）、「美ものがたりー縄文と古代の美ー」（11/16～1/5）、「まつりものがたりー節季市と雪まつりー」（1/6～2/27）、「春ものがたり」（3/1～5/8）
令和5（2023）	「国宝・火焰型土器No.9」（5/3）、「原始の十日町ー縄文時代（1）ー」（5/10～7/3）、「原始の十日町ー縄文時代（2）ー」（7/5～9/4）、「古代の十日町ー古墳時代ー」（9/6～11/6）、「古代の十日町ー奈良・平安時代ー」（11/8～1/11）、「中世の十日町ー鎌倉・南北朝期ー」（1/12～2/26）、「中世の十日町ー室町・戦国時代ー」（2/28～5/13）
令和6（2024）	「国宝・火焰型土器No.8」（5/3）、「土の中から見つかったよー原始の器と道具ーー赤羽根遺跡と城之古遺跡ー」（5/15～7/8）、「土の中から見つかったよー古代の器と道具ーー馬場上遺跡と柳木田遺跡ー」（7/10～9/9）、「土の中から見つかったよー中世の器と道具ーー笹山遺跡と水沢館跡」（9/11～11/11）、「吉田・川西地域の遺跡ー樽沢開田遺跡と枳形遺跡ー」（11/13～2/3）、「松代・松之山地域の遺跡ー向原遺跡と橋詰居村遺跡ー」（2/5～4/14）

表10 関連文献リスト(1)

No.	資料名	編集者／発行者	刊行年
1	小坂遺跡 十日町市文化財調査報告1	十日町市教育委員会／同	1961
2	十日町市苗場山麓地域農業開発事業予定区域内遺跡分布調査(第1次)概報	十日町市教育委員会／同	1974
3	十日町市における文化財の調査Ⅰ(昭和48年度) 十日町市文化財調査報告5	十日町市教育委員会・立教大学／十日町市教育委員会	1974
4	十日町市広域パイロット地域内遺跡群調査概報 十日町市文化財調査報告6	十日町市広域パイロット地域内遺跡群調査団／十日町市教育委員会	1975
5	馬場上遺跡 第1次・第2次発掘調査概報 十日町市文化財調査報告7	十日町市教育委員会／同	1975
6	十日町市における文化財の調査Ⅱ(昭和49年度) 十日町市文化財調査報告9	十日町市教育委員会・立教大学／十日町市教育委員会	1976
7	馬場上遺跡 第3次・第4次発掘調査概報 十日町市文化財調査報告10	十日町市教育委員会／同	1976
8	十日町市広域パイロット地域内遺跡群調査概報2 十日町市文化財調査報告11	十日町市広域パイロット地域内遺跡群調査団／十日町市教育委員会	1976
9	十日町市における文化財の調査Ⅲ(昭和50年度) 十日町市文化財調査報告12	十日町市教育委員会・立教大学／十日町市教育委員会	1977
10	十日町市における文化財の調査Ⅳ(昭和51年度) 十日町市文化財調査報告13	十日町市教育委員会・立教大学／十日町市教育委員会	1978
11	つつじ原B遺跡 十日町市文化財調査報告書14	十日町市教育委員会／同	1979
12	十日町市における文化財の調査Ⅴ(昭和52年度) 十日町市文化財調査報告15	十日町市教育委員会・立教大学／十日町市教育委員会	1979
13	十日町市における文化財の調査Ⅵ(昭和53年度) 十日町市文化財調査報告16	十日町市教育委員会・立教大学／十日町市教育委員会	1980
14	十日町市における文化財の調査Ⅶ(昭和54年度) 十日町市文化財調査報告17	十日町市教育委員会・立教大学／十日町市教育委員会	1981
15	坪野館跡 十日町市文化財調査報告書18	十日町市教育委員会／同	1981
16	十日町市博物館常設展示解説書1 雪	十日町市博物館／同	1981
17	妻有の文化財―十日町・川西・中里・津南―	十日町市博物館／十日町市博物館友の会	1982
18	十日町市博物館常設展示解説書2 信濃川	十日町市博物館／同	1982
19	十日町市博物館常設展示解説書3 織物 生産工程	十日町市博物館／同	1983
20	十日町市博物館常設展示解説書4 織物 歴史	十日町市博物館／同	1984
21	十日町市博物館常設展示解説書別冊 民家	十日町市博物館／同	1987
22	図録 妻有の女衆と縮織り―越後縮の紡織用具及び関連資料―	十日町市博物館／同	1987
23	ガイドブック 十日町市の遺跡	十日町市博物館／同	1988
24	妻有の人物史Ⅰ―先人の生き方に学ぶ―	十日町市博物館／同	1990
25	つまり俳諧と俳人たち	十日町市史編さん室／十日町市博物館	1990
26	妻有の人物史Ⅱ―先人の生き方に学ぶ―	十日町市博物館／同	1991
27	雪国十日町の暮らしと民具―十日町の積雪期用具―	十日町市博物館／同	1992
28	十日町市史 資料編1 自然	十日町市史編さん委員会／十日町市役所	1992
29	十日町市史 資料編3 古代・中世	十日町市史編さん委員会／十日町市役所	1992
30	十日町市史 資料編4 近世1	十日町市史編さん委員会／十日町市役所	1992
31	十日町市史 資料編5 近世2	十日町市史編さん委員会／十日町市役所	1993
32	十日町市史 資料編6 近・現代1	十日町市史編さん委員会／十日町市役所	1993
33	図説越後アンギン	十日町市博物館／同	1994
34	十日町市博物館常設展示案内	十日町市博物館／同	1995
35	十日町市史 資料編7 近・現代2	十日町市史編さん委員会／十日町市役所	1995
36	十日町市史 資料編8 民俗	十日町市史編さん委員会／十日町市役所	1995
37	十日町市史 通史編2 近世1	十日町市史編さん委員会／十日町市役所	1995
38	十日町市史 資料編2 考古	十日町市史編さん委員会／十日町市役所	1996
39	十日町市史 通史編3 近世2	十日町市史編さん委員会／十日町市役所	1996
40	十日町市史 通史編4 近・現代1	十日町市史編さん委員会／十日町市役所	1996
41	縄文の美―火焔土器の系譜―	十日町市博物館／同	1996
42	火焔土器研究の新視点	十日町市博物館／同	1996
43	十日町市史 通史編1 自然・原始・古代・中世	十日町市史編さん委員会／十日町市役所	1997

表11 関連する文献リスト(2)

No.	資料名	編集者／発行者	出版年
44	十日町市史 通史編5 近・現代2	十日町市史編さん委員会／十日町市役所	1997
45	十日町市史 通史編6 きもの産地・十日町のあゆみ	十日町市史編さん委員会／十日町市役所	1997
46	文化財課年報1	文化財課／十日町市教育委員会	1997
47	妻有のいしぶみ	十日町市博物館友の会妻有のいしぶみ編集委員会／十日町市博物館友の会	1997
48	文化財課年報2	文化財課／十日町市教育委員会	1998
49	文化財課年報3	文化財課／十日町市教育委員会	1999
50	文化財課年報4	文化財課／十日町市教育委員会	2000
51	火燄型土器をめぐる諸問題－笹山遺跡の謎に迫る－	十日町市博物館／同	2000
52	文化財課年報5	文化財課／十日町市教育委員会	2001
53	文化財課年報6	文化財課／十日町市教育委員会	2002
54	雪文化三館提携10周年記念企画 北越雪譜と魚沼の風土	十日町市博物館・鈴木牧之記念館・トミオカホワイト美術館／十日町市博物館友の会	2002
55	文化財課年報7	文化財課／十日町市教育委員会	2003
56	文化財課年報8	文化財課／十日町市教育委員会	2004
57	文化財課年報9	文化財課／十日町市教育委員会	2005
58	文化財課年報10	文化財課／十日町市教育委員会	2006
59	文化財課年報11	文化財課／十日町市教育委員会	2007
60	文化財課年報12	文化財課／十日町市教育委員会	2008
61	文化財課年報13	文化財課／十日町市教育委員会	2011
62	文化財課年報14	文化財課／十日町市教育委員会	2012
63	常設展示ガイド	十日町市博物館／同	2014
64	文化財課年報15	文化財課／十日町市教育委員会	2014
65	三十五周年記念誌 古文書に学ぶ	十日町市博物館友の会古文書研究グループ／十日町市博物館友の会	
66	文化財課年報16	文化財課／十日町市教育委員会	2015
67	十日町市博物館 年報 第1号	十日町市博物館／同	2015
68	文化財課年報17	文化財課／十日町市教育委員会	2016
69	十日町市博物館 年報 第2号	十日町市博物館／同	2016
70	松代のいしぶみ	十日町市博物館友の会松代のいしぶみ編集委員会／十日町市博物館友の会	2016
71	十日町市博物館 年報 第3号	十日町市博物館／同	2017
72	十日町市歴史文化基本構想	文化財課／十日町市	2018
73	十日町市博物館 年報 第4号	十日町市博物館／同	2018
74	十日町市博物館 年報 第5号	十日町市博物館／同	2019
75	国宝 笹山遺跡出土品のすべて(改訂版)	十日町市博物館／同	2020
76	十日町市博物館 要覧	十日町市博物館／同	2020
77	十日町市博物館 年報 第6号	十日町市博物館／同	2020
78	縄文の遺産－雪降る縄文と星降る縄文の競演－	十日町市博物館／同	2020
79	十日町市博物館 年報 第7号	十日町市博物館／同	2021
80	常設展示案内ガイド	十日町市博物館／同	2021
81	田沢・壬遺跡保存活用計画	文化財課／十日町市	2022
82	岡本太郎が見て、撮った縄文	十日町市博物館／同	2022
83	十日町市博物館 年報 第8号	十日町市博物館／同	2022
84	里山の石仏－松之山の祈りと信仰－	十日町市博物館／同	2022
85	縄文時代の始まりを探る	十日町市博物館／同	2022
86	十日町市博物館 年報 第9号	十日町市博物館／同	2023
87	笑う縄文人－縄文人の喜怒哀楽－	十日町市博物館／同	2023
88	十日町市博物館 年報 第10号	十日町市博物館／同	2024
89	十日町市文化財保存活用地域計画	文化財課／十日町市	2024
90	J A P A Nのルーツ－雪ふる縄文と世界遺産－	十日町市博物館／同	2024

越後妻有地域における仏像調査報告―天福山真浄院―

A report on the investigation of Buddhist statues in the Echigo-Tsumari region-
Tenpukusan Shinjo-in Temple

福島 治樹¹

HUKUSHIMA Haruki

(2025年3月7日受付; 2025年3月28日受理)

十日町市における指定文化財のうち、仏像については県指定が2件、市指定が9件ある。市内には未だ調査されていない寺社が多く存在するが、私見では江戸時代の優作も見受けられた。

本稿は令和5～6年にかけて四日町天福山真浄院で行われた仏像悉皆調査の結果を伝えるものである。今回の調査ではいくつかの仏像に銘文が確認され、このうちの2件については作者が判明した。制作年については記載がないが、片や江戸時代に活躍した京仏師一運法橋、片や明治時代に小千谷を拠点に活躍した彫刻師柳田昌穂の作であった。これらはこれまでの真浄院の歴史を補填するものであるとともに、郷土史における他地域との交流を表すものである。聞くところによると市内の他寺院でも同仏師の作と伝える仏像がいくつか存在する。今後もこれらの仏像を継続的に調査していくことが1つの課題であり、妻有地域における仏教文化の解明に繋がるだろう。

1. はじめに

現在、十日町市にはおよそ50の寺院が存在し、小さな堂なども含めると100を超えと考えられる(註1)。かつて十日町市や津南町などの周辺地域を総括して妻有地域と呼び、そこには妻有百三十三番霊場というものが存在し、多くの人がその名の通り133の霊場を巡った。

全国を見渡しても133も霊場があるという事例は稀で、通常は西国の三十三番霊場・坂東の三十三観音霊場・秩父の三十四観音霊場を合わせた百観音霊場とすることが多い。妻有地域における霊場の多さは、元々それぞれ美佐嶋三十四霊場・倉俣三十三霊場・大井平三十三霊場・吉田三十三霊場の4つ霊場を1つにまとめたことによる。

天福山真浄院は、十日町市四日町に位置する曹洞宗寺院で、妻有百三十三番霊場には含まれないものの江戸時代から歴史を伝える名刹の1つである。縁あって調査の機会に恵まれたため、本稿にて紹介していく。十日

町市における仏教文化の研究の一助となればと思う。

本稿は、天福山真浄院において行われた仏像の悉皆調査についてまとめたものである。調査は、令和5年6月25～26日・令和6年12月21～22日の計2回行った。

2. 作品解説

今回の調査では、29躯の仏像の調査を行った。像種としては、如来が2躯、菩薩が3躯、天部が3躯、羅漢が21躯であった。[法量]・[品質構造]・[銘文]・[制作年代]・[備考]の順で記す。紙面の都合上、銘文や特筆すべき点がない場合は[銘文]・[備考]を省き、注記の無い銘文についても墨書銘とする。また作品番号と十六羅漢像の名称については失伝しており、調査時に付与したアルファベットの名称を使用する。法量についてはcmを単位とし特段の変更がない場合は省略する。

以下に列举していく。

1 鶴見大学大学院博士課程学生 〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区2-1-3

(1) 木造釈迦如来坐像 (図1) 1 軀

[法量]

総高 137.4 像高 89.4 顎～頭頂 30.1 面長 15.4
面幅 18.3 面奥 23.3 耳張 23.6 肩張 44.8 肘張
56.4 胸厚 24.2 腹厚 29.2 像奥 65.7 台座高 48.0
台座幅 99.4 台座奥 91.1 光背高 146.0 光背幅
91.0

[形状]

釈迦如来の坐像。頭部は螺髪を表すが、後頭部については修理の影響か耳後ろに左右3本ずつ毛筋のみ彫る。水晶製の肉髻珠・白毫を嵌入する。耳朵は環状に彫る。三道相を表す。衲衣を通肩で纏う。禪定印を結び左足を下げ結跏趺坐する。

光背は蓮弁型拳身光の様式を取り、渦巻文様で表す。中心部を二重拳身光で表し、中心部上部には蓮肉を彫り出す。

台座は蓮華座・返花座・八角の框座を組み合わせて構成する。

[品質構造]

寄木造・玉眼嵌入・肉身部金泥・着衣古色。

木寄せは、後頭部に2材を寄せて3材で頭部をなす。体部の中心材は前後に矧ぎ内割りを施し、地付きより10cmの部分に左右の通い桝を設ける。通い桝の渡し部分については後補材を鋸で打ちつける。両肩部から地付きまでを左右に寄せ内割りを施す。脚部と体部を金具(後補)にて留めていた形跡が見られる。頭部は耳前で前後矧ぎを施し、玉眼を嵌入し挿首する。螺髪は彫出し、肉髻頂点から後頭部にかけて1部削られている。この部分については、体内より観察した際に別材で補っていることが確認された。

光背は、蓮弁部分を上・左・右の3材で造り、拳身光に継ぐ。光背下部の桝部分には別材で蓮華模様の材を継ぐ。台座は、須弥壇上から降すことが出来なかったため不明。

[制作年代]

江戸時代か

[備考]

真浄院の本尊である釈迦如来の坐像。制作年代については残念ながら数度の火災で寺史に関する史料の多くが失われており不明な点が多い。

(2) 文殊菩薩立像 (図2・4) 1 軀

[法量]

総高 92.0 像高 59.2 顎～頭頂 16.8 面長 7.0 面幅 5.8 面奥 7.8 耳張 7.0 袖張(天衣最大幅)26.0
胸厚 8.5 腹厚 9.9 裾張 11.5 足先開(外)9.0 台座高(蓮華・岩・框座含む)32.8 台座幅(框座)35.0
台座奥(框座)26.0

[形状]

文殊菩薩の立像。条帛を身に纏い裳を履く。胸元には瓔珞、腕に天衣をつける。框座・岩座・蓮華座の組まれた台座に立ち、右手に宝剣、左手に経巻を持つ。

[品質構造]

木造・寄木造・玉眼・彩色・金泥・白毫水晶製・瓔珞銅製。木寄せについては彩色により不明な部分もあるが、両肩先別材とし、両腕・肘・手首で別材を継ぐ寄木造と考えられる。両足先別材。面部を矧ぎ玉眼を嵌入する。宝髻別材、白毫水晶製。唇に朱を差し、額上部生え際の毛・眉・もみあげ・口髭・顎髭を墨書きする。髪飾り・瓔珞金銅製。持物の宝剣・経巻は木製別材。天衣(垂下部・肘裏円形部)別材。肉身部を金泥で塗る。光背は欠失。

[銘文]

框座裏銘(框座向かって右側面)「法橋一運」(図3)

[制作年代]

江戸時代か

[備考]

本尊釈迦如来坐像向かって左に祀られる脇侍像。

(3) 普賢菩薩立像 (図5・7) 1 軀

[法量]

総高 93.6 像高 59.8 顎～頭頂 16.3 面長 6.2 面幅 6.1 面奥 8.1 耳張 7.3 袖張(天衣最大幅)24.9
胸厚 8.4 腹厚 9.8 裾張 11.8 足先開(外)9.3 台座高(蓮華・岩・框座含む)33.8 台座幅(框座)35.0
台座奥(框座)25.1

[形状]

普賢菩薩の立像。条帛を身に纏い裳を履く。胸元には瓔珞、腕に天衣をつける。框座・岩座・蓮華座の組まれた台座に立ち、両手で先端の欠失した茎を持つ。

[品質構造]

木造・寄木造・玉眼・彩色・金泥・白毫水晶製・瓔珞銅製。木寄せについては彩色により不明な部分もあるが、両肩先別材とし、両腕・肘・手首で別材を矧ぐ寄木造と考えられる。面部矧ぎとして玉眼を嵌入する。宝髻別材、白毫水晶製。唇に朱を差し、額上部生え際の毛・眉・もみあげ・口髭・顎髭を墨書きする。髪飾り・瓔珞金銅製。

持物の宝剣・経巻は木製別材。天衣(垂下部・肘裏円形部)別材。肉身部を金泥で塗る。光背は欠失。

[銘文]

框座裏銘(框座向かって右側面)「法橋一運」(図6)

[制作年代]

江戸時代か

[備考]

本尊釈迦如来坐像向かって右に祀られる脇侍像。

(4) 僧形倚像 1 軀

[法量]

総高 74.5 像高 40.3 臂張 28.2 袖張 36.6 像奥 23.0 垂下部長 21.0 垂下部幅 37.8 台座高(上畳み含む)30.5

[形状]

僧形の坐像。曲縁に坐し、襦袢・內衣・法衣を纏う。腹前で右手に払子を持ち、左手で毛先を握る。

[品質構造]

木造・寄木造・挿首・玉眼・彩色。

[制作年代]

近代か

[備考]

本尊の須弥壇向かって右脇壇に祀られる僧形の倚像。寺伝では天堂如浄、もしくは曹洞宗の高祖道元希玄と伝える。

(5) 達磨大師坐像 1 軀

[法量]

像高 36.5 膝張 16.7 垂下部長 17.1 垂下部幅 30.6 台座高 63.9

[形状]

僧衣を纏い曲縁に座す達磨大師の像。両手先は袖にて隠す。

[品質構造]

木造・寄木造・玉眼・彩色。

[制作年代]

近代か

[備考]

(4)の僧形像と共に右脇壇に祀られる禅宗の開祖達磨大師の坐像。曹洞宗においては後述の大権修理菩薩と共に本堂へと対で祀られる事が多い。このため同時に造像されることが多く、本像も例に漏れず同時期の造像である可能性が高い。

大本堂内の木札中に、「大権修理菩薩／初祖達磨大師寄進 二瓶五右衛門」と記すものがある。この二瓶某は、同寺本堂内の馨子(明和八年・1771 鑄造)を寄進した人物の1人である。この事から木札に記されている像は、本像の前身像にあたると考えられる。

(6) 大権修理菩薩倚像 1 軀

[法量]

像高 30.7 膝張 24.2 垂下部長 14.7 垂下部幅 30.8 台座高 64.3

[形状]

道服を纏い曲縁に座す大権修理菩薩の像。右手を額の正面に当てて遠望相を表す。

[品質構造]

木造・寄木造・玉眼・彩色。

[制作年代]

近代か

[備考]

(4)僧形像・(5)達磨大師像と共に右脇壇に祀られる禅宗における土地神。達磨大師像と同じく前身像があった可能性が高い

(7) 地藏菩薩立像 1 軀

[法量]

総高 70.5 像高 50.2 臂張 15.5 袖張 17.2 腹厚 8.6 裾張 11.0 光背高 61.2 光背幅 20.5 台座高(岩座含む)9.3 台座幅 25.4 台座奥 18.0

[形状]

岩座に立つ地藏菩薩の立像。右手で錫杖を突き、左手で宝珠を護持する。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・白毫水晶製・瓔珞金銅製。

[制作年代]

江戸時代作か

(8) 毘沙門天立像 1 軀

[法量]

総高 64.9 像高 52.7 光背高 19.7 台座高 12.2

[形状]

方形台座上の邪鬼に立つ毘沙門天立像。右手に三叉戟を、左手に宝塔を護持する。慶派などに多く見られる単髻を採用する。光背は法輪型を基礎として左右上部の3か所に火焰光を別材で表す。

[品質構造]

木造・一木造・彫眼・彩色・金泥。

[制作年代]

近代か

(9) 韋駄天立像 1 軀

[法量]

総高 48.9 像高 40.3 光背高 19.7 台座高 8.6

[形状]

方形台座上の岩座に立つ韋駄天立像。両手で右足先に宝棒を突く。

[品質構造]

木造・一木造・彫眼・彩色・金泥。

[制作年代]

近代か

(10) 釈迦如来立像 1 軀

[法量]

総高 73.7 像高 53.4 顎～頭頂 10.9 面長 6.4 面幅 7.2 面奥 7.7 耳張 7.3 臂張 17.4 胸厚 8.9 腹厚 10.1 足先開(外)10.2 台座高(框座含む)20.3 台座幅 30.2 台座奥 24.3

[形状]

与願・施無畏印を結ぶ釈迦如来の立像。

[品質構造]

木造・寄木造・玉眼・古色・白毫肉髻水晶。

木寄せについては体部を前後矧ぎとし、割り首を行う。頭部は耳前で前後に矧ぐ。両手首から先と、足先と足裏のほぞに別材を寄せる。足裏のほぞ接続部分には金箔の痕跡あり。

台座については、蓮華座・岩座・框座で構成されている。蓮華座は金箔、岩座は古色、框座は金箔で仕上げられており後補とみられる。

[銘文]

台座裏銘 上段「志ん志ゅ郎以上」 中段「志ん志ゅ郎以上」 下段「志ん志ゅ郎以上」

[制作年代]

江戸時代か

[備考]

阿難尊者像(11番)と迦葉尊者像(12番)とは一具を成すと考えられ、何れかの御堂からの客仏である可能性が考えられる。

(11) 阿難尊者立像 1 軀

[法量]

総高 81.6 像高 54.0 臂張 18.9 腹厚 8.7 光背高 63.5 台座高 27.6 台座幅 32.4 台座奥 24.2

[形状]

通肩で袈裟を懸け胸前で合掌する仏弟子阿難の立像。

[品質構造]

木造・寄木造・玉眼・彩色。

木寄については、体部を一木。頭部は挿し首とし、面部を矧ぎ、玉眼を嵌入する。

[制作年代]

江戸時代か

[備考]

本像は10番の釈迦如来像と12番迦葉尊者像と共に三尊として本堂大縁突き当りの須弥壇に祀られている。中尊とみられる釈迦如来像よりもやや彫技が硬く同時期の制作とは考えにくい。

(12) 迦葉尊者立像 1 軀

[法量]

総高 84.7 像高 56.9 臂張 18.2 腹厚 9.8 光背高 63.6 台座高 27.8 台座幅 32.1 台座奥 25.0

[形状]

偏袒右肩で袈裟を懸け胸前で合掌する仏弟子迦葉の立像。

[品質構造]

木造・寄木造・玉眼・彩色。

木寄については、体部を一木として足先や左右裾先を別材で造る。頭部は、挿し首とし、耳後ろと面部の2か所を矧ぐ。

[制作年代]

江戸時代か

[備考]

本像は10番釈迦如来像と11番阿難尊者像と共に三尊として本堂大縁突き当りの須弥壇に祀られている。中尊とみられる釈迦如来よりもやや彫技が固く同時期の制作とは考えられない。

(13) 聖徳太子立像 1 軀

[法量]

像高 48.8 臂張 17.0 袖張 16.2 腹厚 9.2

[形状]

頭部の左右に美豆良を結び、体の正面で両手を構え、左

手に柄香炉をもつ聖徳太子の立像。

〔品質構造〕

木造・寄木造・玉眼・彩色。

両肩先袖先を含む体幹部を一材とし、両手・両靴先を別材とする。持物の柄香炉は別材。

〔制作年代〕

江戸時代

〔備考〕

本像は美豆良を結び、左手で柄香炉を持つ姿から一見すると孝養太子像のように思われるが、もう片方の手で持物（欠失）を持つ。この形式は浄土真宗に多く見られ、摂政太子と呼称することが多い。

聖徳太子像については、本堂内木札に「聖徳太子真像・永平和尚画像寄進 山田喜左衛門」と記すものがある。同木札が絵画を指す可能性もあり、本像がこれにあたるかは不明であるが一考の余地がある。

〔14〕十六羅漢像（A～P） 16 軀

A 尊者坐像（図8）

〔法量〕

像高 34.0 膝奥 20.1 垂下部長 13.3 垂下部幅 26.5
光背高 41.0 頭光経 25.2 台座高 23.8 台座幅 38.0
台座奥 27.5

〔形状〕

白色の內衣を纏い、そのうえに橙色の法衣を纏う。左肩には外が群青色で内が赤色の袈裟を懸け、肩の赤紐で吊る。

非常に立体的に表した眉を顰め正面を望む。口には朱をひき、口髭を墨画する。右手は人差し指を伸ばし、その他の指を念じ腹前に構える。左手は膝上に添える。

〔品質構造〕

木造・一木造・挿首・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

〔銘文〕

台座地付部天板銘「柳田／昌稔／□作」 台座前面銘「第二」（図10）

〔制作年代〕

明治時代

B 尊者坐像（図9）

〔法量〕

像高 35.5 膝奥 18.7 垂下部長 12.6 垂下部幅 26.4
光背高 46.8 頭光経 24.3 台座高 23.0 台座幅 37.6
台座奥 27.2

〔形状〕

赤色の法衣を偏袒右肩で纏い、左肩から緑色の横被をかける。足先の部分からは白色の裾が確認できる。

顔をしかめて左前方を睨む。左手で鉢を持ち、右手を鉢に添える。右肩付け根と右手首には臂釧を付ける。

〔品質構造〕

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

〔制作年代〕

明治時代

C 尊者坐像（図11）

〔法量〕

像高 35.2 膝奥 19.1 垂下部長 15.2 垂下部幅 27.0
光背高 47.1 頭光経 24.2 台座高 29.2 台座幅 35.9
台座奥 26.8

〔形状〕

紺色の法衣を偏袒右肩でまとい、左肩から赤色の横被を懸ける。足先からは白色の裾が確認できる。

顔をしかめて左前方を睨む。両手を左太もも上に置く。右肩付け根と右手首には臂釧を付ける。

〔品質構造〕

木造・一木造・挿首・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

〔制作年代〕

明治時代

D 尊者坐像（図12）

〔法量〕

像高 34.7 膝奥 19.3 垂下部長 14.3 垂下部幅 27.6
光背高 44.9 頭光経 24.2 台座高 31.0 台座幅 37.9
台座奥 27.6

〔形状〕

緑色の法衣を頭から被り、両足を組む。その上に両手で印を結ぶ。両手先を衣で隠し、法衣を台座に垂下する。

〔品質構造〕

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

〔銘文〕

像底部銘「第四番」

〔制作年代〕

明治時代

E 尊者坐像（図13）

〔法量〕

像高 33.3 膝奥 19.1 垂下部長 15.5 垂下部幅 27.0

光背高 46.4 頭光経 24.3 台座高 (岩座含む) 29.4
台座幅 (框座含む) 38.1 台座奥 27.4

[形状]

偏袒右肩で赤色の法衣を纏い、茶色の袈裟を懸ける。垂下する右足には緑色の裙が確認できる。

顔をしかめて前方を睨む。両手で膝上に柄香炉を持つ。右肩付け根と右手首には臂釧を付ける。肩から紐を垂らし袈裟環を結ぶ。左足を組み、右足を垂下する。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[銘文]

像底部銘「第八番」

[制作年代]

明治時代

F 尊者坐像 (図 14)

[法量]

像高 35.3 膝奥 26.1 垂下部長 13.9 垂下部幅 27.4
光背高 47.0 頭光経 24.3 台座高 (岩座含む) 23.0
台座幅 (框座含む) 27.9 台座奥 21.8

[形状]

偏袒右肩で瑠璃色の法衣を纏い、橙色の横被をつける。顔をしかめて前方を睨む。右手は肩前で念じ、左手は膝上で蓮の葉を持つ。右肩付け根と右手首には腕釧・臂釧を付ける。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[銘文]

像底部銘「第十一番」

[制作年代]

明治時代

G 尊者坐像 (図 15)

[法量]

像高 49.2 膝奥 18.5 垂下部長 14.0 垂下部幅 25.6
光背高 46.7 頭光経 24.1 台座高 (岩座含む) 23.5
台座幅 (框座含む) 37.8 台座奥 27.3

[形状]

偏袒右肩で緑色の法衣を纏い、左肩に横被をかける。垂下する左足には瑠璃色の裙が確認できる。

顔をしかめて前方を睨む。右手で笏を前面に持ち、左手を膝上に添える。右手首には臂釧を付ける。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[銘文]

像底部銘「第十六番」

[制作年代]

明治時代

H 尊者坐像 (図 16)

[法量]

像高 35.3 膝奥 21.3 垂下部長 12.1 垂下部幅 26.2
光背高 47.4 頭光経 24.2 台座高 (岩座含む) 29.5
台座幅 (框座含む) 37.7 台座奥 27.5

[形状]

赤色の法衣を纏い、青みがかった鼠色の横被をかける。垂下する右足先には緑色の裙が確認できる。

顔をしかめてやや左前方を睨む。右手に五鈷鈴を持ち、左手を膝上に添える。右手首には臂釧を付ける。左足を右太腿上に組み、右足を垂下する。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[備考]

像底部銘「第三番」

[制作年代]

明治時代

I 尊者坐像 (図 17)

[法量]

像高 49.3 膝奥 18.6 垂下部長 13.0 垂下部幅 29.4
光背高 47.1 頭光経 24.4 台座高 29.4 台座幅 37.8 台座奥 27.8

[形状]

白色の法衣を偏袒右肩で纏い、赤色の横被をかける。垂下部からは緑色の裙が確認できる。

相好を崩し正面を向く。右手で木杖を右足付近に突き、左手は膝上で手を握る。左手のうちには持物を持っているとみられる空間があるが欠失。右腕の肩と手首には釧を付ける。垂下する両足には緑の衣が見える。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[銘文]

像底部銘「第五番」

[制作年代]

明治時代

J 尊者坐像 (図 18)

[法量]

像高 50.2 膝奥 17.0 垂下部長 13.0 垂下部幅 26.8
光背高 45.5 頭光経 24.0 台座高 27.4 台座幅 37.7
台座奥 27.5

[形状]

赤色の法衣を偏袒右肩で纏い、緑色の横被をかける。両足先からは黒色の裙が確認できる。

瞋目し、右手を右肩横に掲げ蓮華と水を持つ。左手は左膝上置く。右足を組み、左足を垂下する半跏踏み下げとする。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[制作年代]

明治時代

K 尊者坐像 (図 19)

[法量]

像高 35.8 膝奥 19.0 垂下部長 14.5 垂下部幅 26.5
光背高 46.5 頭光経 24.0 台座高 23.5 台座幅 36.0 台座奥 27.0

[形状]

緑色の法衣を偏袒右肩で纏い、白色の横被をつける。足先には赤色の裙が確認できる。

瞋目し、正面を向く。右手は体側面で宝珠を掲げ、左手は数珠を握る。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[銘文]

台座 (框座上部 (岩座下)) 銘「第二」

[制作年代]

明治時代

L 尊者坐像 (図 20)

[法量]

像高 35.8 膝奥 17.5 垂下部長 13.8 垂下部幅 27.8
光背高 47.3 頭光経 24.5 台座高 24.0 台座幅 24.0
台座奥 27.5

[形状]

赤色の法衣を偏袒右肩で纏い、茶色の横被をつける。足先には淡い藍色の裙が確認できる。

口を真一文字に結び穏やかな面相を正面に向ける。頭頂部分は剃髪とするが、巻き毛を頭の脇部分に残す。眉毛

と髭についても同様の巻き毛で表現する。胸前に両手で経巻を持つ。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色。

[銘文]

像底部銘「第七番」

[制作年代]

明治時代

M 尊者坐像 (図 21)

[法量]

像高 37.2 膝奥 18.5 垂下部長 13.1 垂下部幅 27.6
光背高 46.8 頭光経 24.2 台座高 28.8 台座幅 38.1
台座奥 27.4

[形状]

淡い緑色の法衣を偏袒右肩で纏い、白色の横被をつける。足先には朱色の裙が確認できる。

肌色を乳白色で表す他の像とは異なり、色白に見えるよう彩色する。若相で遠くを諦観の眼差しで望む。右手は体重をかけるように岩座に突き、左手は岩座上に立てた左足の膝上に置く。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色。

[制作年代]

明治時代

N 尊者坐像 (図 22)

[法量]

像高 33.4 膝奥 19.3 垂下部長 12.7 垂下部幅 27.4
光背高 45.8 頭光経 23.7 台座高 27.6 台座幅 38.2
台座奥 27.3

[形状]

白色の内衣に黒色の法衣を纏い、その上から緑色の横被をつける。横被は1部翻っている箇所から内側が赤色となっていることが確認できる。

目を見開き、左前方を望む。両手を僧衣と袈裟で隠し左膝に置く。

[品質構造]

木造・一木造・挿首・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[銘文]

像底部銘「第十三番」

[制作年代]

明治時代

O 尊者坐像 (図 23)

[法量]

像高 34.1 膝奥 19.2 垂下部長 14.5 垂下部幅 26.5
光背高 40.6 頭光経 25.3 台座高 (岩座含む) 29.3
台座幅 (框座含む) 37.9 台座奥 27.3

[形状]

黄色の內衣に緑色の僧衣を纏い、その上から青色の横被をつけ、袈裟を懸ける。袈裟は外側を朱色として内側を藍色で表す。左肩には円形の袈裟環をつけ、後ろから紐で袈裟を吊る。

厳しい表情で前方を望む。右手は右膝上で持物を持つ形をとり (現在欠失)、左手は左膝上に置く。

[品質構造]

木造・一木造・挿首・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[銘文]

像背腰部朱漆銘「青室貞松信女／禪室慧濤信女／善山妙恵信女／施主 山田與齋」(与齋か) (図 26)

台座地付部正面銘「第一／柳田昌穂／御作也」(図 25)

[制作年代]

明治時代

[備考]

銘文にある施主山田与齋については不明だが、台座銘にある柳田昌穂は明治時代に小千谷市を中心に活動した彫刻師である。詳細については別記する。

P 尊者坐像 (図 24)

[法量]

像高 35.7 膝奥 21.2 垂下部長 11.2 垂下部幅 26.5
光背高 48.0 頭光経 24.3 台座高 (岩座含む) 22.2
台座幅 (框座含む) 37.9 台座奥 27.5

[形状]

赤色の法衣を纏い、その上から白色の横被をつける。左足先には、緑色の裙が確認できる。

瞋目して正面を望む。右手は体重をかけるように岩座に突き、左手は左膝上に置く。左足先付近には緑色の下衣を覗かせる。他の像とは異なり岩座ではなく虎座に坐する。

[品質構造]

木造・一木造・玉眼・彩色・胡粉盛り上げ彩色。

[制作年代]

明治時代

未調査像

僧形坐像 (道元禅師か)

3. 重要作例 本尊釈迦三尊像・十六羅漢像

今回の調査作例のうち文殊菩薩立像・普賢菩薩立像・聖徳太子立像・十六羅漢坐像に銘文が発見された。このうち聖徳太子の除く3点は仏師名が判明し、おおよその制作年が推測される。

文殊菩薩立像・普賢菩薩立像

まず文殊菩薩立像・普賢菩薩立像の作者とみられる一運法橋は、近世仏師事績データベースに製作・修復が6件、地誌類の記述が4件報告されている(註2)。データベース上で最も古い事績としては天和3年(1683)に徳島つるぎ町見性寺の如意輪観音坐像造像が挙げられる。銘記位置は台座で、墨書にて「大仏師一運法橋作」と記される(註3)。逆に最も新しい事績としては、享保元年(1716)山梨南アルプス市円通寺の如意輪観音坐像の造像が挙げられる。銘記位置は台座で、墨書にて「京極通り二条下ル／宇兵衛／京大仏師法橋一運／息子／大仏師全心」(註4)と記される。活動期間としては天和3年(1683)～享保元年(1716)頃までとみられる。

今回の文殊普賢両像は、先述のように台座裏に墨書銘が記され、いずれも「法橋一運」と記す。年紀は無く、造像年は不明である。

真浄院は、天正年中(1573～1591)に創建されてから過去2・3度の火災にあっている。過去帳では「当院八世即円代之元禄十一年六月十三日夜出火諸堂残らず焼失し、元禄十三年八月十二日に上棟した。亦当山十世在仙和尚代又々焼失し十一世雲蓋和尚代に本堂建立」と記す(註5)。

中条中林の享保15年(1730)の記録では「六月八日午後九時半四日町真浄院出火いたし、午前二時迄に方丈庫裡山内衆寮迄残らず焼け払い」とある(註6)。

また尾崎小川弥左エ門の記録では「真浄院焼失の処、幸い上田に註文はづれあり、買い求めその代金本堂九十両で、出来上り百両と一寸で寄付は云々」と記し、享保17年(1732)の記録では「七月廿日真浄院上棟九月廿日入仏供養」と記す。同19年(1734)の記録では「四日町庫裡建立六月十六日に上棟」、寛延4年(1751)には「天福山七月八日隠寮建立五月十五日上棟」と記す(註7)。

これらの記録を火災に注目して整理すると以下のよう

になる。

イ) 元禄 11 年 (1698)6 月 13 日

8 世覺湛即圓の代の火災 (過去帳)

ロ) 年次不明

10 世大安在仙の代の火災 (過去帳)

ハ) 享保 15 年 (1730)6 月 8 日

午後 9 時半に四日町真浄院で出火し、午前 2

時までの方丈庫裡山内衆寮焼失 (中条中林)

イの火災に際に住職を務めていた真浄院 8 世覺湛即圓は 7 世榮岩雷尊の法嗣であり、貞享 5 年 (1668) に總持寺へと瑞世している。受業師は存越 (真浄院 5 世)、嗣法師は雷尊 (同 7 世) が務めている。残念ながら住持していた期間についての記録はないが、次代の 9 世可岩虎有が元禄 15 年 (1702)8 月 4 日に總持寺へ瑞世していることからこれ以降もしくは宝永 7 年 (1710) の示寂を機に世代を交代したとみられる (註 8)。

ロの火災で住持を務めていたとされる真浄院 10 世大安在仙は、宝永 7 年 (1710) に總持寺へ瑞世している。だが寺院については円蔵寺と記しており、少なくとも瑞世の段階では真浄院所属ではない。受業師は即圓 (真浄院 8 世) が務め、嗣法師は堅寧 (十日町市松林山相国寺 6 世か) が務めている。享保 6 年 (1721) には 9 世可岩虎有が示寂しておりこの前後から、11 世雲蓋僧鼎が總持寺へ瑞世した享保 15 年 (1730)8 月 5 日前後に世代を交替したと考えられる (註 9)。過去帳では雲蓋の代に本堂建立と記す (註 10)。

ハの火災では住持についての記録がない。イの時の再建は元禄 13 年 (1700)8 月 12 日に上棟し、ハの時の再建は享保 17 年 (1732)7 月 20 日に上棟・入仏供養を行っている。ロの記録は再建が 11 世の代となっており年紀が合致する。つまり 10 世から 11 世への交代は享保 17 年以前となる。

両脇侍は台座の銘文から作者が判明しており、前述の一運の造像活動期間に最も近いのは享保 17 年の入仏供養である。この時期に住持であった 11 世雲蓋僧鼎は大梅法撰の弟子であり、兄弟弟子には、徳川綱吉の側用人柳沢吉保・荻生徂徠・細井廣澤などがある。寺宝の中にはこれら由縁の品も伝わっている。再建にあたって京仏師が選定されたとしても不思議ではない。現状、享保元年 (1716) 以降の事績は確認されておらず、この像が享保 17 年頃の造像であれば現時点で一運法橋最晩年の作となる。文殊普賢菩薩像の作例が他に発見されていないため比較検討が困難であるが、これについては今後

の課題としたい。

十六羅漢像

十六羅漢像の作者柳田昌穂はお隣の小千谷市を中心に活躍した近代彫刻家である。遺作の大半を欄間彫刻が占めており、仏像の作例についてはまだまだ研究が進んでいない。

幸いにも昌穂に関する記録が多く残されており以下にその人生をまとめていく。

小千谷市吉谷町打越で天保 5 年 (1834)7 月 11 日に、柳田久左衛門昌翁 (生没年不明) の子として生まれる (註 11)。祖父に柳田庄左衛門善慶 (註 12) を、曾祖父に柳田照道 (註 13) をもつ。昌穂は明治 45 年 (1912)1 月 (註 14) に亡くなるまでに、多くの作品を残しているが、年次の判明している作品は非常に限られる。

代表的な事績としては、明治 33 年 (1900) に、パリで行われた万国博覧会に「額縁置物台付」 (註 15) を出品し、銀牌を受賞している。その他には小千谷市吉谷村大雄山円満寺へ明治 33 年 8 月に水子地藏尊を納めている (註 16)。この銘文は 2 種類の筆跡からなり、一つは善慶と記すもの、もう一つはそれを墨消しして柳田庄左衛門の名と年紀を記すものがある。この時期には既に善慶が没していることから、昌穂が修理を行い祖父の墨書を墨消しした可能性が高い。その他には旧小澤家住宅仏壇 (新潟市指定文化財) などでも造像しており、今後の研究によってはさらに多くの作例が発見される可能性が高い。

今回銘文が発見された十六羅漢像は、真浄院の檀家と考えられる山田氏が寄進したものである。過去帳との照合により時期がより詳細にわかる可能性が高い。これについても今後の課題とする。

4. おわりに

今回は天福山真浄院にて調査した作例について記した。関連する作例については調査が及ばず、一運法橋や柳田昌穂についてはさらなる研究の余地がある。

今後は市内の寺院の調査を進めるとともに、これらの作例が日本彫刻史におけるどのような立ち位置にあたるのか見直していきたい。

謝辞

今回の執筆にあたり、天福山真浄院東結真住職に手

厚い支援をいただきました。調査では、鶴見大学緒方啓介先生・森咲音氏・岸野愛奈氏・宮本晃成氏にご協力いただきました。

また本調査は、真浄院檀家総代福島竹作氏との縁によるものであり、合わせてここに感謝申し上げます。

満寺インスタグラム7月16日投稿 (<https://www.instagram.com/p/C9eFYIezX5b/?igsh=ajNwc2RwamVoeWFq>)

註

- 1：十日町市には後述する妻有百三十三番霊場があり、この中には今日まで続いてきた寺院が多く存在する。これらについては十日町市・中魚沼郡青年僧侶の会 編 1985『妻有の百三十三番 ふる里の霊場巡り』、新潟県第1宗務所第8教区青年僧侶の会 2024『越後妻有ふるさとの寺』で紹介されている。
- 2：近世仏師事績データベース <http://www.busshi.net/search.cgi>
- 3：つるぎ町教育委員会 編 2007、『つるぎ町の文化財』
- 4：息子の部分は弟子の誤読とみられる。南アルプス市教育委員会 編 2011『南アルプス市内仏像等悉皆調査報告書』参照
- 5：竹内道雄 編 1997『念五世晋山記念 天福山真浄院史資料』所収の丸山哲英 1989「真浄院史考」『昭和還暦大井田物語』十日町市公民館大井田分館
- 6：註5を参照
- 7：註5を参照
- 8：納富常天・尾崎正善 編 2011『住山記—總持禪寺開山以来住持之次第—』大本山總持寺
- 9：註8を参照。余談ではあるが、雲蓋僧鼎の受業師は在仙(真浄院10世)が、嗣法師は大梅(長野宝寿山正安寺16世大梅法撰)が務めている。真浄院においては11世からその後20世まで大梅の法系が続く。
- 10：註5を参照
- 11：岩下庄之助 1980『小千谷郷土物語』歴史図書社
- 12：小千谷市文化財協会 編 1984『年表小千谷』小千谷市青木山極楽寺の伽藍造営や同寺明石堂の再建で棟梁を務めた。
- 13：註12を参照
- 14：『越佐工芸家名鑑』新潟県美術商組合昭和59年(1984)では23日とするが、『年表小千谷』は28日とする。
- 15：註12を参照、小千谷市史編修委員会 編 1969『小千谷市史上巻』では高砂の翁媼と記す。
- 16：令和6年正月にあった能登半島地震にて蓮華座より墜落し修理した際に銘文が発見された。大雄山円



図1 本尊 釈迦如来坐像



図2 左脇侍 文殊菩薩立像

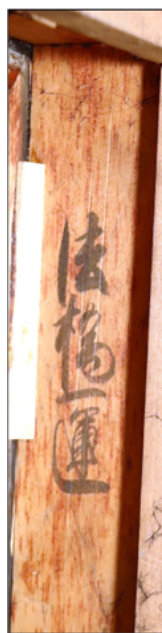


図3 文殊菩薩立像 框座裏銘



図4 文殊菩薩立像 拡大



図5 右脇侍 普賢菩薩立像



図6 普賢菩薩立像 框座裏銘



図7 普賢菩薩立像 拡大



図8 十六羅漢像 A尊者



図9 十六羅漢像 B尊者



図10 十六羅漢像 A尊者 台座地付部天板銘



図11 十六羅漢像 C尊者



図 12 十六羅漢像 D 尊者



図 14 十六羅漢像 F 尊者



図 13 十六羅漢像 E 尊者



図 15 十六羅漢像 G 尊者



図 16 十六羅漢像 H 尊者



図 18 十六羅漢像 J 尊者



図 17 十六羅漢像 I 尊者



図 19 十六羅漢像 K 尊者



図 20 十六羅漢像 L 尊者



図 22 十六羅漢像 N 尊者



図 21 十六羅漢像 M 尊者



図 23 十六羅漢像 O 尊者



図24 十六羅漢像 P尊者



図26 十六羅漢像 O尊者 像背腰部朱漆銘

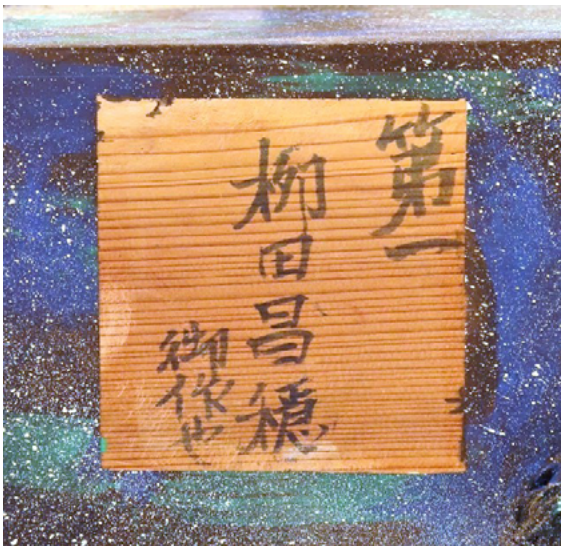


図25 十六羅漢像 O尊者 台座地付正面部銘

十日町市野首遺跡における縄文時代中・後期の黒曜石利用

The use of obsidian at the Nokubi site, Tokamachi city in the Middle and Late Jomon Period

菅沼 亘¹

SUGANUMA Wataru

(2025年3月31日受付; 2025年4月7日受理)

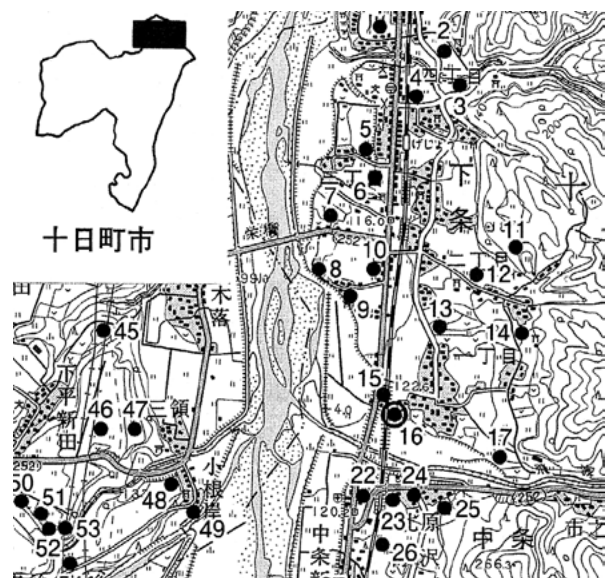
新潟県十日町市に所在する野首遺跡は、縄文時代中・後期の集落跡である。1996年(平成8)に発掘調査が行われ、計790点の黒曜石製石器が出土した。この内の660点について産地推定分析が行われ、95%が信州産との結果が出ている。これらの石器には、石鏃、釣針形石器、石核、剥片・碎片類、原石などがあり、遺跡内に黒曜石原石が持ち込まれ、主に石鏃が製作されていたことがわかった。また、中・後期の信濃川上・中流域では、星ヶ塔や星ヶ台、霧ヶ峰などの諏訪系と、和田峠や小深沢、和田鷹山など和田峠系の信州産黒曜石が多用されていることが既に指摘されていたが、本遺跡においても同様の傾向であった。そして、これらの原石は前期以降に中部地方の黒曜石原産地を中心に形成されたと考えられている広域の黒曜石流通システムの中で、千曲川・信濃川ルートを通して本遺跡に搬入されたと推定した。

はじめに

野首遺跡は、十日町市に所在する縄文時代中・後期の遺跡である。筆者は本遺跡の発掘調査と、その後の発掘調査報告書の刊行作業を担当した。発掘調査及び遺物整理作業の中で、原石を含む黒曜石製石器がまとまって出土したことから、産地推定分析を行い、その結果を公表した(十日町市教育委員会編2017)。本稿では、この分析結果に基づいて、本遺跡における黒曜石を石材とした石器製作の実態を明らかにし、縄文時代中・後期の信濃川上・中流域及び上信越地域における黒曜石利用の在り方について検討する。

1 遺跡の概要

野首遺跡は、十日町市北部にある上新田集落の西側に位置する(第1図)。遺跡は信濃川の右岸、信濃川とその支流である飛渡川との合流点に広がる沖積扇状地に立地し、標高は116~124mを測る。1996年(平成8)に、県営圃場整備事業に伴い、十日町市教育委員会により発掘調査が行われた。計6,368㎡の範囲が調査され、



第1図 遺跡の位置(図中の○印)

縄文時代中・後期の集落が発見されている(十日町市教育委員会編2011,2017,2020)。

集落は上段の集落1と下段の集落2からなり、両者の間には土器捨て場が形成されている。集落1では、竪穴住居13軒、掘立柱建物8棟、石組炉20基、土坑

1 十日町市博物館 〒948-0072 新潟県十日町市西本町一丁目448番地9

88基、配石遺構32基、埋設土器36基、ピット類が検出され、これらは径60m程の環状に配置されている。配石遺構の多くは、遺構の分布が希薄な集落の中心部に集まる。集落2では竪穴住居4軒、掘立柱建物1棟、石組炉3基、土坑2基、ピット類が検出されているが、集落の南側が水田造成により大きく削平されていたため、集落形状は不明である。竪穴住居の多くは中期、掘立柱建物は後期前半、配石遺構は後期前葉～中葉、埋設土器は中期後葉～後期初頭に位置付けられている。

土器捨て場からは、土器・土製品、石器・石製品など大量の遺物が出土している。出土した土器は、前期後半～後期中葉のものが見られる。主体を占めるのは、中期中葉～後期前葉で、中期中葉の火焰型・王冠型土器など在地系の他に、東北系、北陸系、関東（中部高地）系の土器も出土している。後期の土器は、在地系の三十稲場式、南三十稲場式土器の他に、信州・関東系が見られる。石器・石製品については後述する。出土品1,291点が、新潟県指定有形文化財（考古資料）に指定されている。

エリア	判別群	記号	試料数	%
和田 (WO)	ブドウ沢	WOBD	1	0.15
	牧ヶ沢	WOMS	0	0
	高松沢	WOTM	3	0.46
和田 (WD)	芙蓉ライト	WDHY	1	0.15
	鷹山	WDTY	252	38.71
	小深沢	WDKB	16	2.46
	土屋橋北	WDTK	3	0.46
	土屋橋西	WDTN	4	0.61
	土屋橋南	WDTM	2	0.31
	古峠	WDHT	0	0
諏訪	星ヶ台	SWHD	345	53
神津島	恩馳島	KZOB	2	0.31
	砂糠崎	KZSN	0	0
高原山	甘湯沢	THAY	1	0.15
	七尋沢	THNH	0	0
新津	金津	NTKT	0	0
新発田	板山	SBIY	7	1.08
北上川	折居1群	KKO1	0	0
	折居2群	KKO2	1	0.15
	折居3群	KKO3	0	0
高岡	二上山	TOFK	1	0.15
不明産地1	NX	NX	12	1.84
合 計			651	99.99
不可など			9	
総 計			660	

第1表 遺跡出土黒曜石の産地組成

2 遺跡の石器組成と使用石材

剥片類を除く石器組成は、石鏃261点、尖頭器2点、石錐29点、石匙6点、三脚石器61点、板状石器18点、楔形石器182点、打製石斧1,557点、磨製石斧232点、石錘243点、磨石類2,608点、石皿102点、石棒29点、石冠1点、玉類10点などである。打製石斧と磨石類が石器組成の6割近くを占めている。なお、三脚石器や板状石器、石棒など一部の石器を除いて、出土状況から上記の石器を中期と後期に分離することはできなかった。

これらの使用石材は37種類に及ぶ（中村由克氏の鑑定による）。石材組成を見ると、石鏃や石錐などの剥片石器類は頁岩（頁岩、黒色頁岩、凝灰質頁岩、珪質頁岩含む）54%、無斑晶質安山岩22%、凝灰岩8%、その他16%で、その他には黒曜石、玉髓、碧玉（鉄石英）、チャートなどが含まれる。石錘や磨石などの礫石器は安山岩69%、砂岩9%、溶結凝灰岩6%、その他16%である。石棒や玉類などの石製品は、軽石23%、結晶片岩21%、安山岩11%、砂岩12%、凝灰岩10%、その他23%であった。

遺跡の使用石材は、遺跡から産出地までの距離によって、近距離石材（10km圏内）、中距離石材（20～50km圏内）、遠距離石材（50km以上離れる）に分類されている。剥片石器は、頁岩と無斑晶質安山岩などの中距離石材を主体に、黒曜石、チャート、碧玉、玉髓などの遠距離石材、これに対して、礫石器は安山岩などの近距離石材が多用されている。石製品は、石棒に使用されている点紋片岩、玉類の透閃石岩、角閃岩は遠隔地石材、その他は不明であった。

3 黒曜石製石器の産地推定分析と概要

(1) 産地推定分析

望月明彦氏によって、遺跡出土の黒曜石製石器660点の産地推定分析が行われている（望月2017）。分析法は、エネルギー分散蛍光X線分析である。分析結果は第1表のとおり、和田エリア282点（42.7%）、諏訪エリア345点（52.3%）と信州産が95%を占め、その他の産地が12点（1.8%）、不明産地12点（1.8%）、測定・推定不可9点（1.4%）であった。和田エリアでは鷹山群が252点と主体を占め、諏訪エリアはすべて

星ヶ台群である。

その他の産地は、神津島・恩馳島群2点、高原山・甘湯沢群1点、新発田・板山群7点、北上川・折居2群1点、高岡・二上山群1点となっている。不明産地とされたものは、12点で1グループが作られており、未発見産地の可能性が指摘されている。また、測定・推定不可のものは、表面の風化や汚れにより、正確な分析ができなかったものである。

(2) 黒曜石製石器の概要

産地推定分析が行われた資料以外に、未分析の資料が130点存在し、黒曜石製石器の総数は790点である。その内訳は、石鏃55点、釣針形石器2点、二次加工ある剥片類130点、剥片・碎片類515点、石核10点、原石78点となっている。また、これらの総重量は1,532gである。以下、それぞれについて記載する。

①石 鏃 (写真1)

石鏃55点の内、完形品は19点で、凹基無茎鏃12点(1～12)と未成品7点(13～19)。最大長は9.1～27.5mm、最大幅は7.3～20.5mmに分布し、最大長10.0～20.0mm、最大幅10.0～15.0mmの範囲に比較的まとまる(第2図)。重量は0.16～2.81gに分布し、1.0g以下のものが多くを占める(第3図)。一方、黒曜石製以外の石鏃は、最大長15.0～30.0mm、最大幅10.0～20.0mmの範囲にまとまる(第4図)。全体的に黒曜石製の石鏃は小形のものが多く。なお、完形品以外は、欠損品29点、未製品と思われるもの7点である。なお、石鏃の使用石材に占める黒曜石の割合は、点数比で8.8%、重量比では1.8%であった。

②釣針形石器 (写真1)

20は、つまみ部を欠損する。全体形は「し」字状を呈し、両面とも丁寧な加工が施されている。最大長29.8mm、最大幅9.5mm、最大厚6.2mm、重量は2.7gである。21は、円形のつまみ部をもつ。両面加工により、全体形が「く」字状を呈する。最大長15.1mm、最大幅17.9mm、最大厚4.1mm、重量は1.1gを測る。

③二次加工ある剥片類 (写真2)

二次加工ある剥片類130点の内、79点(61%)に両極剥離痕が観察できる。その素材は、角礫等が6点(7.6%)、分割礫もしくは半割礫が40点(50.6%)、横長もしくは縦長剥片が33点(41.8%)と、分割礫や半割礫を素材とするものが半数を占めている。

分割礫・半割礫素材のもの(22～35)は、両極剥

離痕が分割面(腹面)のみに見られるもの19点、分割面とその反対側の面(背面)の両面に見られるもの17点、背面のみに見られるもの4点である。両面に見られるものは、断面形がクサビ形もしくは三角形を呈するものが多い。また、背面側縁の一部に二次加工が施されているものも存在する。

横長・縦長剥片素材のもの(36～50)では、両極剥離痕が腹面のみが16点、腹面と背面の両面が17点で、ほぼ同数であった。両面に見られるものは、断面がクサビ形を呈するものが、一定数見られる。

次に、両極剥離痕が観察できなかった51点を見ると、縦長剥片素材は11点、横長剥片素材が33点、分割礫素材は5点、礫素材が2点で、横長剥片素材が60%以上を占める。

以上の最大長は9.1～32.1mm、最大幅は8.1～25.4mmに分布し、最大長が15.0～25.0mm、最大幅が10.0～20.0mmにまとまる(第6図)。重量は0.21～4.91gに分布し、概ね0.5～3.0gにまとまる(第7図)。

④剥片・碎片類

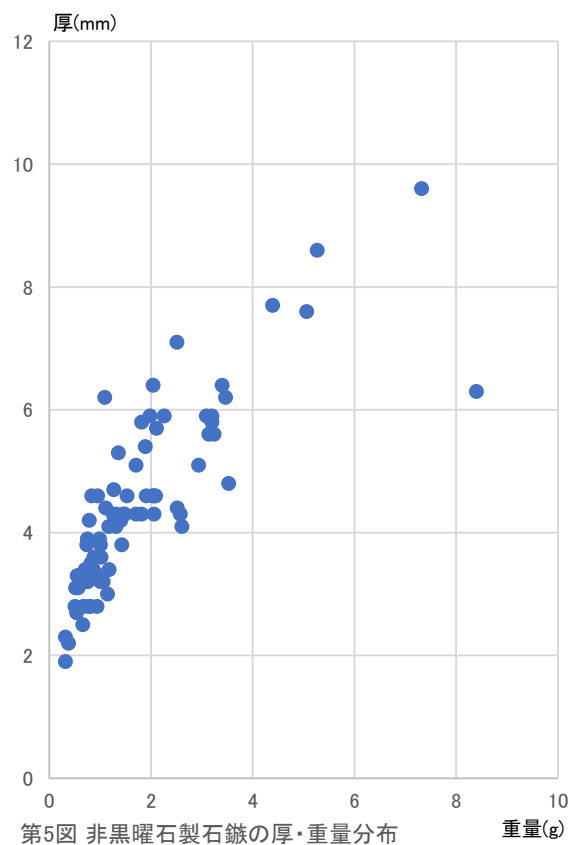
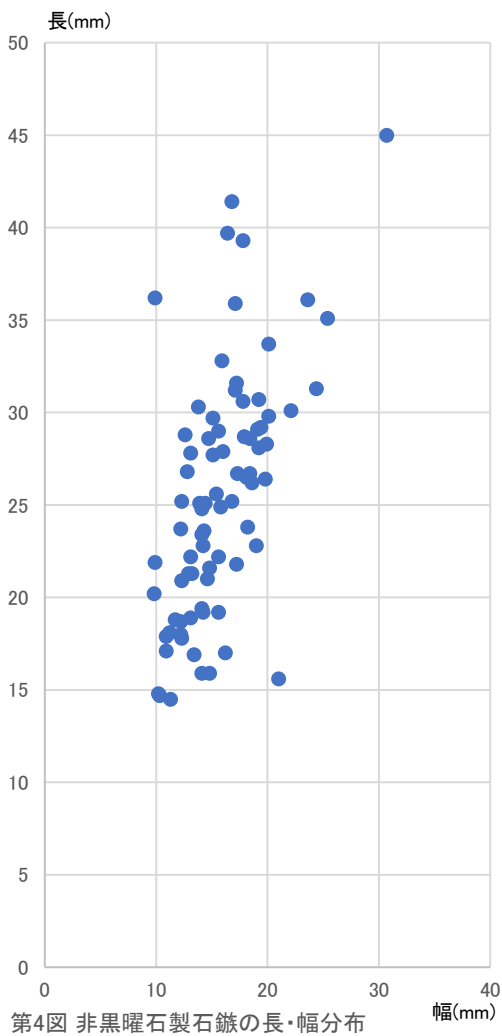
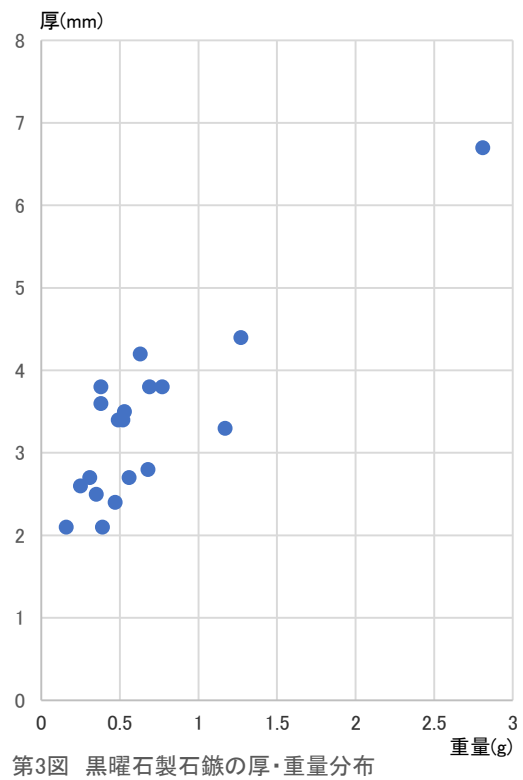
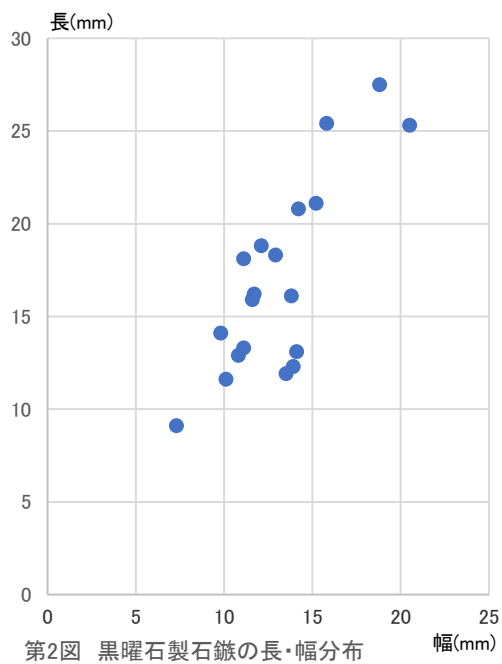
剥片及び碎片類は、石器の製作や剥片の生産、原石の分割の際に生じたものと思われる。背面に礫面を残すものは260点で、全体のほぼ半数を占めている。

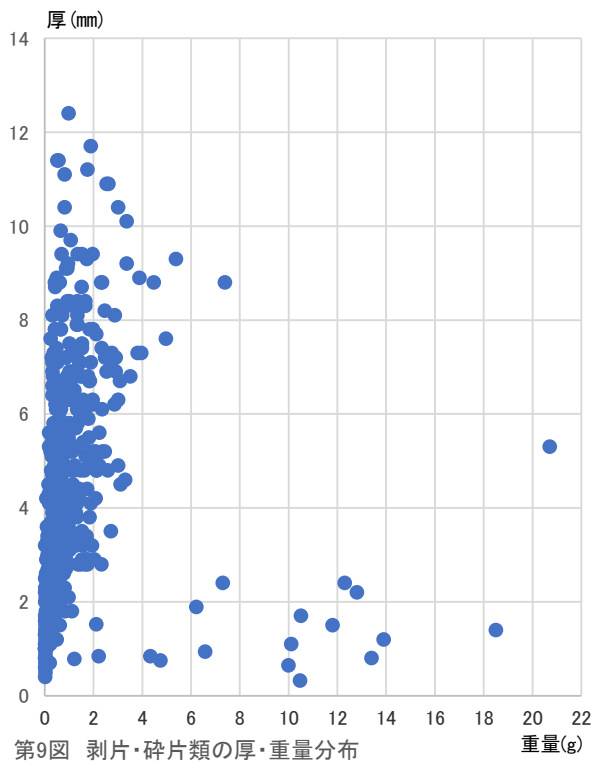
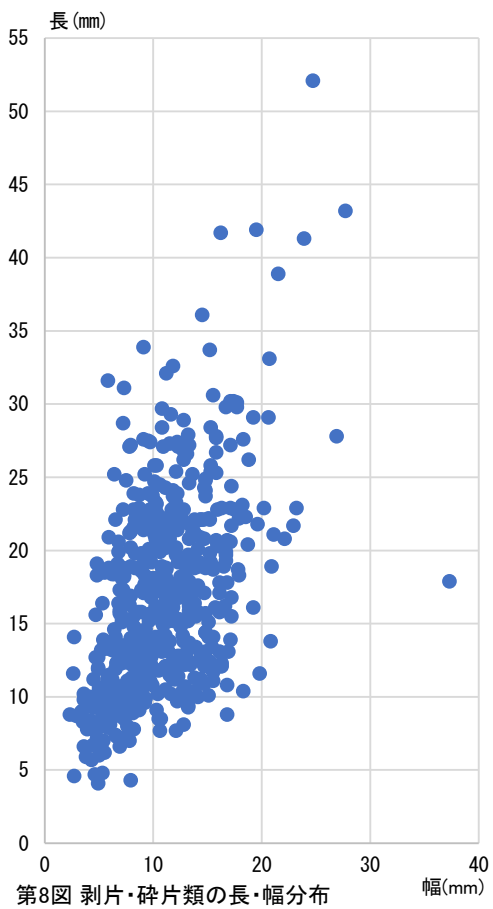
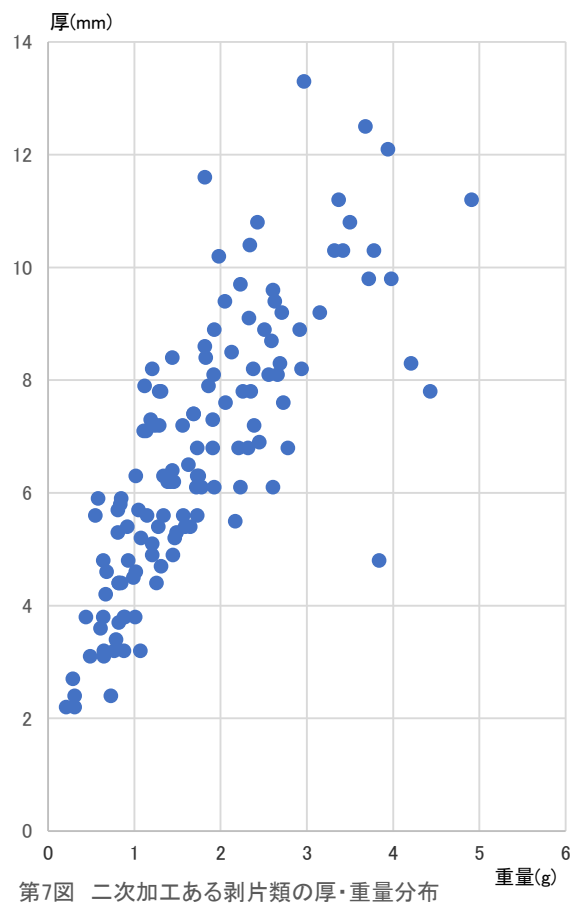
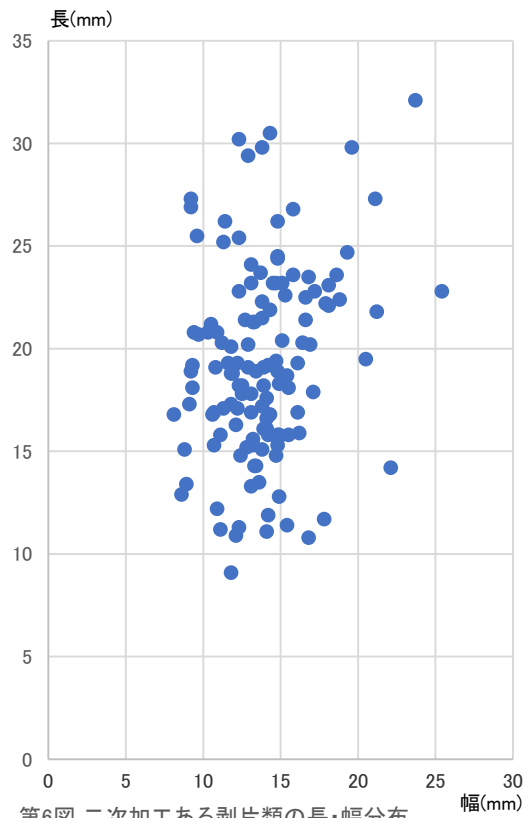
最大長は4.1～52.1mm、最大幅は2.3～37.3mmに分布し、最大長が5.0～25.0mm、最大幅が5.0～15.0mmにまとまる(第8図)。また、最大長が10.0～25.0mmのものが384点あり、75%を占める。重量は0.01～20.7gまでのものがあるが、1.0g未満が352点、1.0～2.0gが100点、2.0g以上が63点であり、1.0g未満のものが68%を占めている(第9図)。

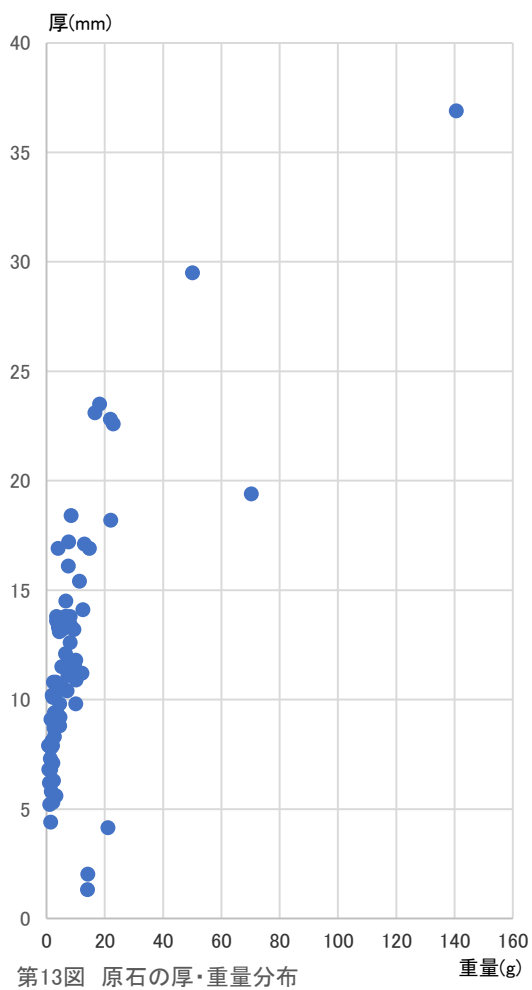
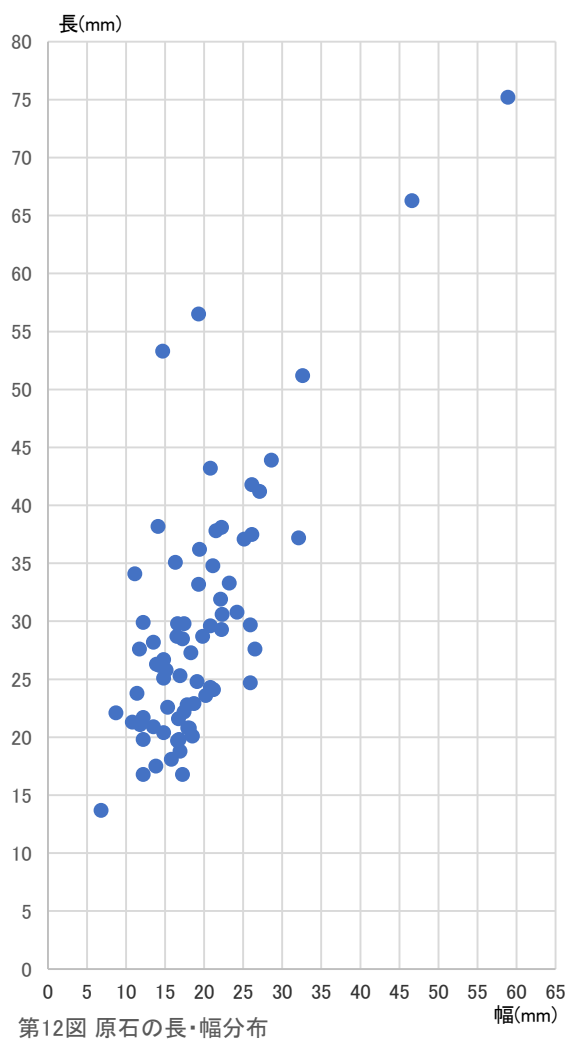
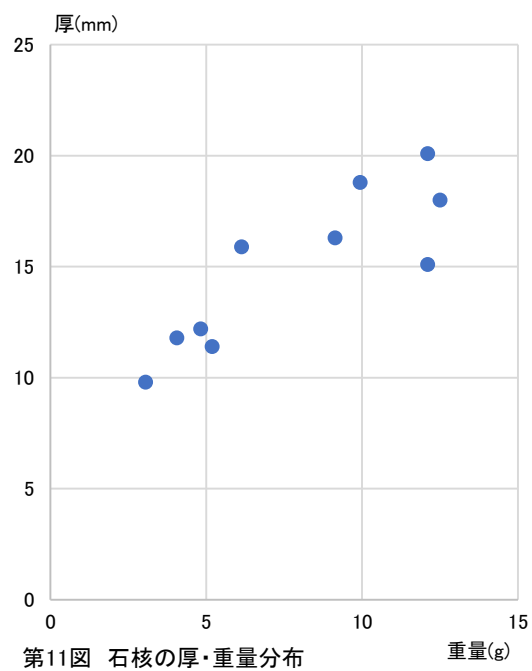
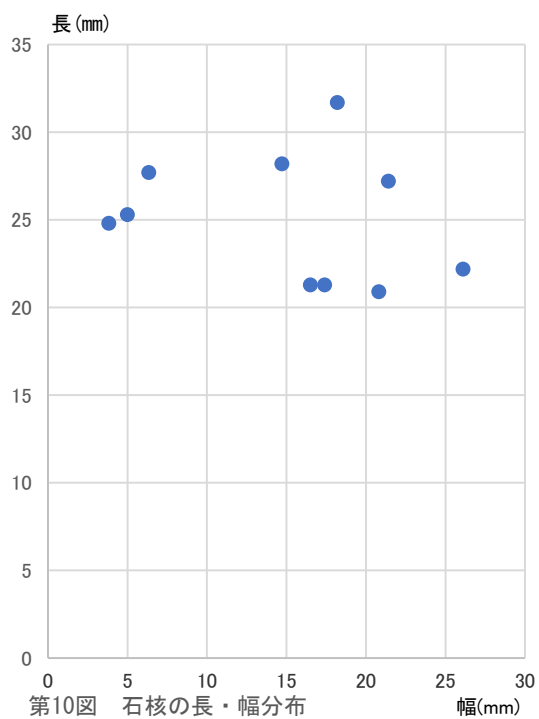
⑤石 核 (写真3)

51～55は、角礫もしくは分割角礫を素材とし、両極打法により剥片が剥離されている。いずれも礫面打面である。51・52は、長さ20.0～30.0mm、幅5.0～10.0mmの縦長剥片剥離痕が残る。53・54は、幅5.0mm前後の細石刃様の剥片が剥離されている。52～54は、断面が楔形を呈する。55は剥片状の礫を素材とし、長さ10.0mm、幅15.0mm前後の横長剥片が剥離されている。断面はクサビ形を呈する。

56～59は、両極剥離痕が観察できない。56～60は、角礫もしくは分割角礫を素材とする。礫面を打面として、長さ10.0～15.0mm、幅20.0mmほどの横長剥片が剥離されている。58は分割円礫が素材と推定され、求







心状の方向から、小形横長剥片の剥離痕が残る59は剥片素材で、背面と腹面の両面から、小形横長剥片が剥離されている。

重量は、3.05～12.5gに分布し、6.0g以下と9.0g以上のものに2分される(第11図)。

⑥原 石 (写真4～6)

原石の形状には、角礫状51点(61～73・85・87)、棒状7点(74～79)、板状1点(86)、剥片状19点(80～84)があり、角礫状が65%を占める。

表面の礫面は、主に磨りガラス状、目の細かい紙ヤスリ状、光沢のある風化した剥離面状、光沢のない(少ない)風化した剥離面状で、これらが複数組み合わせ、同一の礫面をもつものは少ない。磨りガラス状の礫面には、縞状、擦痕状、ヒビ割れ状の筋が入り、樹脂状の光沢をもつものが少数見られる。目の細かい紙ヤスリ状の礫面は表面がザラザラしているのに対し、風化した剥離面状の礫面は、表面がツルツルしている。また、崩落や原石同士の接触でできたと考えられる衝撃剥離痕が、半数以上に見られる。

原石の大きさは、最大長が9.7～75.2mm、最大幅が6.8～58.9mmに分布し、最大長は15.0～30.0mm、最大幅は10.0～20.0mmにまとまる(第12図)。重量は、0.73～140.69gのものがあり、10.0g未満が59点、10.0～25.0gが16点、50.0g以上が3点と、10.0g以下の小形品が76%を占めている(第13図)。50.0g以上の大形品の重量は、それぞれ50.09g(85)、70.31g(86)、140.69g(87)である。

4 遺跡における黒曜石を利用した石器製作の実態

本遺跡では、石鏃を中心とした小形剥片石器の製作に黒曜石が利用されていたと考えられる。小形の礫もしくは分割礫を石核の素材として、長さ1.0～3.0cm程度の剥片が礫面を打面として、もしくは両極打法で剥離され、石鏃などの素材となっている。また、分割もしくは半割礫から両極打法によって、断面がクサビ形の両面加工品が準備され、石鏃へ加工されていた可能性も指摘できる。棒状の敲石や、爪形の線状痕が残る台石の出土も、これを裏付けるものであろう。

本遺跡と同様に黒曜石を利用して、盛んな石器製作が行われていた新潟県内の遺跡に、新発田市扉山遺跡(早期)、同石田遺跡(中期)、新潟市重稲葉遺跡群(前期)、

同大沢遺跡A地区(中期)、妙高市中ノ沢遺跡(早期)などがある(土橋1998)。

扉山遺跡と石田遺跡では、板山産の小形円礫が搬入され、両極打法によって剥離された剥片が、石鏃やスクレイパー、楔形石器などの素材となっている(阿部1983、扉山遺跡発掘調査会1988)。なお、石田遺跡の資料については、339点の産地推定分析が行われ、ほぼすべてが板山産であることが判明している(鈴木・金成・杉原2011)。

重稲葉遺跡群(第1・第2遺跡)では、剥片石器の使用石材に占める黒曜石の割合が80%を超え、ほとんどの黒曜石が長野県星ヶ塔産である。単一打面から剥離された剥片や、頻繁な打面転移によって剥離された剥片、両極打法による剥片などが、石鏃の素材となっている(前山2023)。

大沢遺跡A地区では、石器・剥片類の使用石材に占める黒曜石の割合がほぼ50%で、石鏃のみを見ると42%である。黒曜石の原石は、大形と玉砂利状の円礫があり、前者は信州産、後者は新潟県内産と推定されている。なお、同市上ノ原遺跡(後期)では、黒曜石の玉砂利状原石とこれを素材とした石核がまとまって出土しており、両極打法が多用される(巻町1994)。

中ノ沢遺跡では、石鏃未成品や両極石器の他、剥片・碎片など計131点が出土し、石鏃の製作が行われていた可能性が指摘されている(土橋・寺崎ほか1997)。

野首遺跡を含め、以上の遺跡では、黒曜石を利用した石器製作において、両極打法が用いられており、これは素材となった原石や剥片等が小形であったことに起因するものと考えられる。

5 遺跡への黒曜石原石の搬入形態

本遺跡には、主に重量50g以下の黒曜石原石が搬入されている。大工原豊氏は、前期から中期初頭の関東・中部地方における遺跡出土の黒曜石原石を重量に基づいて、100g以下の小形、100～300gの中形、300～2,000gの大形、2,000g以上の超大形に分類し、小形原石は石鏃の製作用、中形原石は石鏃製作以外に、副葬品や威信材として流通していたとしている(大工原2003)。この分類に従えば、本遺跡の原石のほとんどが小形に含まれ、中形は1点のみである。その重量は25g以下と、さらに小形の範疇に入る。

同氏によれば、群馬県域では後期前葉以降になると、

遺跡名	時期	信州系					板山	その他	分析不可等	計	文 献
		諏訪系	和田峠系	男女倉系	蓼科系	その他					
おざか清水遺跡（十日町市）	前期後葉	109						神津島(3)、不明(2)		114	建石・濱田・二宮2014
道下遺跡（津南町）	前期末～中期初頭	5	24					不明(98)		127	佐藤2018
洗峰C遺跡（津南町）	前期末～中期初頭	11	10					畑宿(2)		23	菅頭・建石・二宮2006
洗峰E遺跡（津南町）	前期末～中期初頭	18	2							20	菅頭・建石・二宮2006
馬高遺跡（長岡市）	中期	1	1				2	月山(1)		5	長岡市教育委員会2002
岩野原遺跡（長岡市）	中期	8						不明(2)		10	長岡市教育委員会2002
梨ノ木C遺跡（南魚沼市）	早期～中期	12	4							16	蓼科・東村1996
野首遺跡（十日町市）	中期前葉～後期中葉	345	278	4			7	高原山(1)、神津島(2)、北上川(1)、高岡(1)、不明(12)	9	660	十日町市教育委員会2017
笹山遺跡（十日町市）	中期中葉～後期前葉	35	3			2		不明(4)	1	45	十日町市教育委員会2016
道尻手遺跡（津南町）	中期～後期	32	18							50	菅頭・建石・二宮2006
堂平遺跡（津南町）	中期～後期	22	2				9			33	菅頭・建石・二宮2006
八反田遺跡（津南町）	中期前葉～後期後葉	154	74		1		24	畑宿(2)	1	256	菅頭・建石・二宮2006
川久保遺跡（湯沢町）	中期前葉～後期前葉	75	11					大北川(3)		89	新潟県教育委員会2012
上野スサキ遺跡（津南町）	中期中葉～後期前葉	52	4		1			深浦(1)		58	三浦・建石・二宮2012
岩野原遺跡（長岡市）	後期	3	2				3	不明(2)		10	長岡市教育委員会2002
三十稲場遺跡（長岡市）	後期	2	3				5			10	長岡市教育委員会2002
中島遺跡（十日町市）	後期前葉～中葉	18	28				1			47	三浦・建石・二宮2012
正面ヶ原A遺跡（津南町）	後期後葉～晩期前葉	392	41	6	3	2		高原山(1)		445	宇田川・三浦・建石・二宮2010
和泉A遺跡下層（上越市）	中期初頭	16	6					不明(1)		23	新潟県教育委員会1999
和泉A遺跡上層（上越市）	晩期前葉	32	1					不明(2)		35	新潟県教育委員会1999
六反田南遺跡下層（糸魚川市）	中期前葉～中葉	21	4					神津島(1)、不明(12)		38	新潟県教育委員会2018

第2表 信濃川上・中流域及び上信越地域における縄文時代遺跡の黒曜石産地推定分析結果

このような超小形原石を出土する遺跡が増加すると指摘されており（大工原 2007）、本遺跡の黒曜石原石についても、その多くは後期に帰属する可能性がある。また、本遺跡では、黒曜石製の局部磨製石鏃が1点出土している（写真 1-8）。局部磨製石鏃は、後・晩期の関東・中部地方に広く分布し、関東型と中部型があり、原則として関東型は黒曜石製であるという（大工原 2006）。なお、霧ヶ峰の黒曜石原産地では、採掘された原石の選別が行われ、その結果、40g 以下の小形原石の多くが不要とされたとの指摘もある（山科 2010a）。

6 信濃川上・中流域及び上信越地域における縄文時代中・後期の黒曜石利用

新潟県における縄文時代の黒曜石利用については、土橋由理子氏が黒曜石製石器出土遺跡の悉皆的な調査を基にまとめている（土橋 1998）。同氏によれば、県内では前期から中期に黒曜石の利用が盛んになり、信濃川流域以西では、主に信州系の黒曜石が利用され、原石から石器を製作している遺跡では、製作される石器が石鏃に限定されると言う。今回検討した本遺跡における黒曜石利用の在り方も、これを追認する結果となった。

信濃川上・中流域及び上信越地域における縄文時代遺跡の黒曜石産地推定分析結果は第2表のとおりである。本遺跡の他に、信濃川流域では長岡市馬高遺跡（中期）、岩野原遺跡（中・後期）、三十稲場遺跡（後期）、十日町

市笹山遺跡（中・後期）、中島遺跡（後期）、津南町道尻手遺跡（中・後期）、堂平遺跡（中・後期）、上野スサキ遺跡（中・後期）、八反田遺跡（中・後期）、正面ヶ原A遺跡（後・晩期）、川久保遺跡（中・後期）、上信越地域では上越市和泉A遺跡（中・晩期）、糸魚川市六反田南遺跡（中期）などにおいて分析が行われている。分析者により産地の分類や呼称が異なるため、同表中で示した信州系黒曜石の細分については、大竹憲昭氏による産地名対比に従った（大竹 2018）。

中・後期の信濃川上・中流域では、星ヶ塔や星ヶ台、霧ヶ峰などの諏訪系と、和田峠や小深沢、和田鷹山など和田峠系の信州産黒曜石が多用され、信州系以外に新潟県内の板山、東北の北上川、深浦、関東の高原山、畑宿、神津島産などの黒曜石が加わるという状況である。これまでも、津南町出土資料において行われた産地推定分析の結果から、同様な傾向が指摘されている（菅頭ほか 2006, 三浦ほか 2012, 建石ほか 2014, 佐藤 2018）。

特に、野首遺跡や八反田遺跡、正面ヶ原A遺跡など黒曜石の保有量が多い遺跡では、信州系の中でも諏訪系と和田峠系が主体を占めるものの、男女系や蓼科系も見られ、また、信州系以外の黒曜石もあり、産地のバラエティーが豊かである。

先行する前期の遺跡を見ると、中・後期と同様に諏訪系と和田峠系が主体を占めるが、信州系以外の産地の黒曜石は少ない傾向である。なお、現時点で神津島産黒曜石の出土例は、十日町市内のおざか清水遺跡と野首遺跡

のみであり、特筆される。

一方、上信越地域の中・晩期では、信濃川上・中流域と同様に、諏訪系と和田峠系が主体を占めている。また、六反田遺跡下層（中期前葉～中葉）では神津島産1点が出土しており、注目される。

関東・中部地方の前期における黒曜石の流通について考察した大工原豊氏は、流通に第1～3段階の変遷を想定している（大工原2007,2008）。第1段階の前期初頭から中葉には、原産地では転石の入手が中心で、和田峠系が主体を占め、互酬連鎖交換によって黒曜石が集落間を動くあり方を想定している。第2段階の前期後葉では、原産地で表層採掘された和田峠系の原石が多量に流通し、遠隔地にも流通の拠点となる大規模集落が出現する。そして、この拠点集落の交易従事者が介在した交易の出現を想定している。

第3段階の前期末葉から中期初頭には、諏訪系の原石が主体となる。原産地では本格的な露頭採掘が始まり、原石の質的・量的選別も行われる。そして、遠隔地の中継拠点に原石の安定的な供給が可能となったことで、南関東を含む広範囲の流通圏が形成されたと指摘している。また、この時期に、前述した新潟市重稲葉遺跡資料が示すように、新潟県域への流通ルートも整備されたとする。

前期末に帰属する十日町市おざか清水遺跡133号遺構出土の黒曜石資料114点の内、諏訪系（星ヶ塔）が109点と大半を占めるという分析結果が示されている（建石ほか2014）。これらも、同氏が指摘する広域流通圏の形成過程の中でもたらされたものであろう。

一方、長野県の中期における黒曜石の利用状況については、藤森栄一氏の縄文農耕論を受けた、中部高地における石鏃の減少と、打製石斧や石皿、磨石類などの植物質食料の採取、加工に関連する石器の増加という石器組成の傾向から、黒曜石の利用頻度が低下し、黒曜石の採掘もおこなわれていないと考えられている（安蒜1999）。これに対し、塚原秀之氏は、長野県域における多数の遺跡の詳細な分析から、黒曜石原産地の周辺地域では、爆発的な人口の増加に伴い、中期中葉に黒曜石の消費量が増加したことを明らかにした（塚原2007）。また、宮坂清氏は藤内式期における集積された黒曜石原石の観察から、中期中葉における黒曜石の活発な利用と、その背景にある採掘活動の可能性を指摘している（宮坂2012a,b）。これまで、中部高地における黒曜石の採掘址は前期末、後期中葉、晩期前半で確認されているが、

今後は中期における採掘址の発見が期待される。

おわりに

野首遺跡の中・後期の集落には、中部高地から多くの黒曜石原石が搬入され、石鏃を中心とした小形の剥片石器が製作されていたことが明らかとなった。これらの原石は、中部高地の黒曜石原産地からどの様にしてもたらされたのか。

本遺跡では、中期中葉には火焰型土器など在地系土器と共に、長野・群馬県域に広く分布する新巻土器や焼町土器などを含む曲隆線文系土器が多く出土している。一方、後期前半には三十稲場式や南三十稲場式土器など在地系土器の他に、信州・関東系の称名寺式、堀之内1・2式、加曾利B1～B3式土器が出土している。また、死者の頭部に土器を被せ、甕被り、鉢被り、土器被覆葬などと呼ばれる儀礼を伴う配石墓群が形成されている。同様な葬送儀礼は後期前半の関東・中部地方で多くの例が知られる。以上のことから当時、本遺跡に暮らした人々と中部地域の人々との間の交流がうかがえる。これを背景として、黒曜石が遺跡にもたらされたことは容易に想像できる。

中部地域における縄文時代前期の黒曜石流通の動態を検討した金山善昭氏は、前期が黒曜石流通の画期と考え、前期に定住化が進行したことにより、遠隔地における黒曜石の獲得形態が、それ以前の互酬による流通から再分配による交易システムに発展したとする。そして、原産地から黒曜石が連鎖的に各地の大型集落に供給され、大型集落は周辺の小型集落に黒曜石を分配したと考えている（金山1993,1998）。なお、これと同様に大工原豊氏が、互酬連鎖交換、交易初期、交易発展段階という3段階の変遷を示したことは、前述のとおりである。

また、長崎元廣氏は諏訪湖周辺と八ヶ岳山麓における中期の黒曜石の一括埋納例を集成し（長崎1984）、さらに、山科哲氏は前期末から中期初頭に掛けて一括埋納例が急増し、後期以降は減少することを明らかにしている（山科2010b）。

野首遺跡の黒曜石は、前期以降に中部地方の黒曜石原産地を中心として形成された広域の黒曜石流通システムの中で、千曲川・信濃川ルートでもたらされたと考えられる。複数の集落間を経由していたのか、また、本遺跡が黒曜石を周辺の集落へ再分配していた大型集落であったのかなど、詳細の解明については今後の課題としたい。

本稿を執筆するにあたり、文献収集において小松隆史氏、山科哲氏、鈴木曉氏よりご協力いただいた。末筆ながら記してお礼申し上げます。

引用・参考文献

- 阿部朝衛 1983「バイポーラーテクニックの技術的有效性について」『考古学論叢』1 芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
- 安蒜政雄 1999「鷹山遺跡群の性格と研究の意義」『鷹山遺跡群Ⅲ』長門町教育委員会
- 宇田川滋正・三浦麻衣子・建石 徹・二宮修治 2010「正面ヶ原 A 遺跡出土黒曜石の産地分析」『正面ヶ原 A 遺跡から垣間見る縄文社会—北信越の縄文時代後期後葉から晩期前葉—』津南町教育委員会
- 大竹憲昭 2018「黒曜石産地推定分析から何がわかるか」『最古の信州ブランド 黒曜石 先史社会の石材獲得と流通』長野県立歴史館
- 金山喜昭 1993「縄文時代前期における黒曜石交易の出現」『法政考古学』第20集 法政考古学会
- 金山喜昭 1998「集落間の交流と交易」『季刊 考古学』第64号 雄山閣出版
- 小杉 康 2003「生業としての交易活動」『考古学研究』第50巻・第2号
- 斎藤幸恵 1985「黒曜石の利用と流通」『季刊考古学』第12号 雄山閣出版
- 佐藤信之 2018「津南町における旧石器時代から縄文時代の遠隔地石材—津南町出土黒曜石原産地分析資料を中心として—」『新潟考古』第29号 新潟県考古学会
- 菅頭明日香・建石 徹・二宮修治 2006「縄文時代における新潟県内出土黒曜石資料の原産地推定」『火焰土器の時代—その文化を探る—』津南町教育委員会
- 鈴木 曉・金成太郎・杉原重夫 2011「新潟県新発田市石田遺跡・松橋遺跡出土黒曜石製遺物の原産地推定」『環境史と人類』第4冊 明治大学学術フロンティア紀要
- 関 雅之 2018「新潟県新発田産黒曜石の産出と原石の動態—産地同定資料から見た板山産原石分布の諸問題—」『新潟考古』第29号 新潟県考古学会
- 大工原豊 2002「南関東における縄文時代前期後半期の黒曜石石器群の流通」『考古学資料館紀要』第18輯 國學院大學考古学資料館
- 大工原豊 2003『ストーンロード—縄文時代の黒曜石交易—』安中市ふるさと学習館
- 大工原豊 2006「縄文時代後・晩期の局部磨製石鏃—縄文石器の型式変化に関する研究—」『縄文時代』17 縄文時代文化研究会
- 大工原豊 2007「黒曜石交易システム—関東・中部地方の様相—」『ものづくり 道具製作の技術と組織』縄文時代の考古学6 同成社
- 大工原豊 2008「縄文時代前期の黒曜石石器群の研究—石器群の工程配置と流通—」『縄文石器研究序論』六一書房
- 建石 徹 2012「黒曜石の縄文石器の産地分析と流通」『季刊考古学』第119号 雄山閣出版
- 建石 徹 2014「縄文時代中期末葉における黒曜石製石器の産地の傾向—新潟県魚沼地域の様相を起点として—」『沖ノ原式期の文化様相—縄文時代中期末用葉の越後を探る—』津南町教育委員会
- 建石 徹・濱田 翠・二宮修治 2014「黒曜石産地と流通—縄文時代前期末 十日町市おざか清水遺跡133号遺構の事例を中心に—」『魚沼地方の先史文化』津南町教育委員会
- 谷 和隆 2013「信州産黒曜石の広がり」『研究発表資料集 文化の十字路 信州』日本考古学協会 2013年度長野大会実行委員会

- 中部高地研究グループ・山科 哲 2006「中部高地黒曜石原産地と周辺地域の遺跡分布」『黒曜石文化研究』第4号 明治大学博物館
- 塚原秀之 2007「中部高地における縄文時代の黒曜石消費量の推移」『考古学研究』第54巻・第3号
- 堤 隆 2002「中部高地における黒曜石研究の現状と課題」『黒曜石文化研究』創刊号 明治大学博物館
- 堤 隆 2018「信州黒曜石原産地の資源開発と供給をめぐって」『島根県古代文化センター研究論集』第19集
- 十日町市教育委員会編 2011『野首遺跡発掘調査報告書Ⅰ<遺構編>』十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第43集
- 十日町市教育委員会編 2016『笹山遺跡発掘調査報告書—第8～10次調査—』十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第55集
- 十日町市教育委員会編 2017『野首遺跡発掘調査報告書Ⅱ<遺物編1>』十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第57集
- 十日町市教育委員会編 2020『野首遺跡発掘調査報告書Ⅲ<遺物編2>』十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第70集
- 十日町市博物館編 2015『縄文後期の墓 栗ノ木田遺跡—縄文人の死と弔い—』
- 土橋由理子 1998「新潟県における縄文時代の黒曜石利用について」『研究紀要』第2号 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土橋由理子・寺崎裕助ほか 1997『中ノ沢遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第84集
- 扉山遺跡発掘調査会 1988「縄文早期扉山遺跡発掘調査報告」『北越考古学』創刊号 北越考古学研究会
- 長岡市教育委員会編 2002『馬高・三十稲場遺跡—史跡「馬高・三十稲場遺跡」環境整備事業に伴う発掘調査報告書Ⅰ—』遺構遺物概要編・自然科学分析編
- 長崎元廣 1984「縄文の黒曜石貯蔵例と交易」『中部高地の考古学』Ⅲ 長野県考古学会
- 新潟県教育委員会編 1999『和泉 A 遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集
- 新潟県教育委員会編 2012『川久保遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第233集
- 新潟県教育委員会編 2018『六反田南遺跡Ⅳ』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第271集
- 前山精明 1994「黒曜石の動き」『巻町史』通史編・上巻
- 前山精明 2023「新潟市西蒲区重稲場遺跡群の前期終末縄文土器と黒曜石—信州産黒曜石を多用する縄文時代前期終末集落の位置づけ—」『新潟市文化財センター年報』第10号
- 巻町編 1994『巻町史』資料編1・考古
- 三浦麻衣子・建石 徹・二宮修治 2012「縄文時代後期初頭等の黒曜石製石器産地分析と土器胎土分析—新潟県妻有地域出土資料を中心として—」『三十稲場式土器文化の世界—4・3Ka イベントに関する考古学現象②—』津南町教育委員会
- 宮坂 清 2002「縄文時代の黒曜石採掘活動」『黒曜石文化研究』創刊号 明治大学博物館
- 宮坂 清 2005「信州産黒曜石原石の形状について」『考古学ジャーナル』525 ニューサイエンス社
- 宮坂 清 2006「黒曜石の産状と入手法」『黒曜石文化研究』第4号 明治大学博物館
- 宮坂 清 2012a「縄文石器における黒曜石の利用形態」『季刊 考古学』第119号 雄山閣出版
- 宮坂 清 2012b「黒曜石から見る資源開発と流通」『長野県考古学会誌』143・144 合併号
- 望月明彦 2017「野首遺跡出土黒曜石資料の産地推定分析」『野首遺跡

発掘調査報告書Ⅱ<遺物編1>』十日町市教育委員会編

山科 哲 2007「縄文時代中期後半における黒曜石製石器群の遺跡間比較の試み—梨久保遺跡と上木戸遺跡住居址出土石器群を用いて—」『考古学集刊』第3号 明治大学文学部考古学研究室

山科 哲 2008「黒曜石採掘に伴う原石選別と石器製作作業の把握に向けて—長野県鷹山遺跡群星糞峠第1号採掘址出土資料を用いて—」『明治大学博物館研究報告』第13号

山科 哲 2010a「霧ヶ峰黒曜石原産地における黒曜石採掘と流通」『移動と流通の縄文社会史』雄山閣

山科 哲 2010b「黒曜石の一括埋納例と流通」『移動と流通の縄文社会史』雄山閣

藁科哲男・東村武信 1996「新潟県下遺跡出土の黒曜石製遺物の石材産地分布」『新潟考古』第7号 新潟県考古学会



写真1 石鏃・釣針形石器

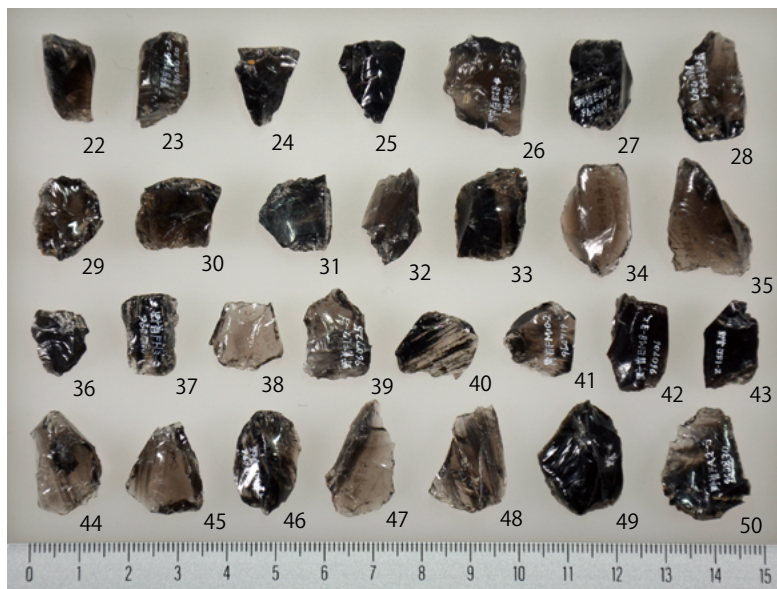


写真2 二次加工ある剥片類



写真3 石核

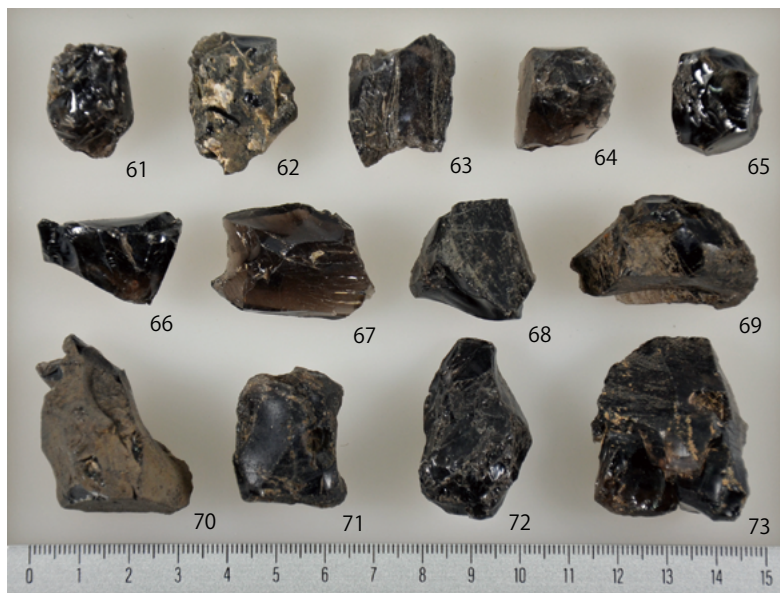


写真4 原石①



写真5 原石②

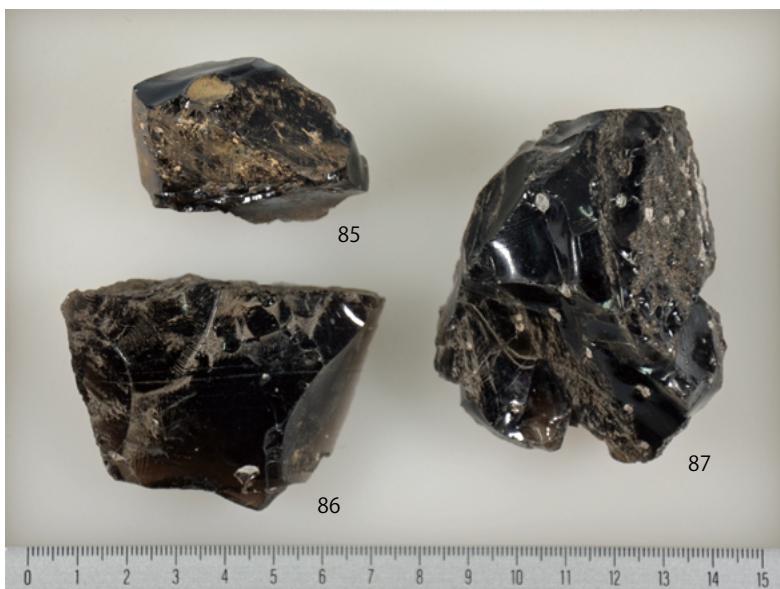


写真6 原石③

十日町市博物館研究紀要第4号

Bulltin of the Tokamachi City Museum, No.4 (March 2025)

ISSN 2437-0118

発行日 2025年4月11日

編集・発行者 十日町市博物館

〒948-0072 新潟県十日町市西本町一丁目448番地9